

# 各種法然上人傳に引用されている法然の詞

―特に『傳法流通繪』『琳阿本』『弘願本』『古德傳』をめぐって―

藤 堂 恭 俊

I 法然の詞と傳記作者の編纂意圖

II 傳記に引用された法然の詞の詮索

III 法然の詞の出處と各傳記における傳承 I (『醍醐本』關係 上)

IV 同 右 II (『醍醐本』關係 下)

V 同 右 III (そ の 他)

VI 小 結

## I

ここに題して『各種法然上人傳に引用されている法然の詞』と言う拙稿の意圖するところは、法然の生涯を描く各種の傳記が法然のいかなる詞を紹介してきたか、と言う經過を見極めるにある。ここに言う法然の詞というの

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

は、眞に法然が物語つた詞と言う嚴密な意味で使用してゐるのではない。そこにはあきらかに後世、傳記作者によつて法然に假托された詞もふくまれているわけである。従つて各種の法然傳に引用されている法然の詞のなか、眞なるもののみを究明しようなど言う意圖は、この拙稿にはたらいいていないのである。かりに偽作された法然の詞が見出されたとしても、そう言つた偽作された法然の詞がいかなる傳記に、いつ頃から、法然の詞の隨一として登場するに至つたか、等を知ることが出來れば十分であると思う。かかる研究意圖を中核として、それに附隨する諸問題を併せ考察しようと思う。

先ず第一に問題視されることは、法然には『法然上人傳記』（醍醐本）や『西方指南抄』、さらに『黒谷上人語燈錄』『同拾遺語燈錄』と言つた語録が編纂されてゐるにも拘らず、法然の生涯を描かんとする傳記のなかに何故に法然の詞を持ちこまなければならなかつたのであろうか。言葉をかえて言うならば、傳記のなかに何故に、法然の詞をさしはさむのであるかと言う問題は、傳記作者の編纂意圖を問うことになるであらう。しからば傳記のなかに法然の詞をもちこむということに、いかなる意義があるのであろうか。法然の八十年の生涯における出來事を詞書として綴り、その間に法然の詞をさしはさむと言うことは、その傳記の讀者をして知らず知らずの間に、法然はいかなる教えを説いたかを知らしめるにある。この點、相手に知らしめようとする傳道、教化的意圖のもとに、法然の詞を傳記にもちこんだことが看取されるであらう。かかる傳記作者の編纂意圖は、法然の詞を集録した語録を繙く以上に讀者自身に深い感銘を與え、傳道・教化上、十分な効果を發揮し得たわけである。つまり傳記のなかに法然の詞をさしはさむと言うことは、別の角度から見れば、その詞を具體的な歴史的背景とのつながりのもとに傳えるということである。即ち法然がある時、ある處で、ある人に對して物語つたというように、その詞の成立を文學

的叙述によつて再現することである。このことは讀者をして法然が物語る會座にさそひこみ、強い感銘をもつて受けとらすとともに、理解を容易ならしめるに役立つたであらうことが推測される。そうした點で、傳記のなかに法然の詞をもちこんだ傳記作者の編纂意圖の内には、讀者に與える心理的効果が既に計算されていたことを忘れてはならない。この點、法然の語録を編纂する編纂者の意圖と、傳記の中に法然の詞をもちこまんとする傳記作者の意圖とは、同じ法然の詞を扱いながらも、ひらきが出てくるのは當然なことである。

さてしからば法然の生涯を描く傳記のなかに、法然の詞をもちこんだ最初の傳記はいかなる傳記であつたであらうか。私はこのことに關して、既に舊稿<sup>1</sup>のなかで『法然聖人繪』(所謂『弘願本』第一、二、四卷の)をもつて嚆矢とすることを指摘して置いた。しかし〔Ⅱ〕において觸れるようにそれは誤りであり、實は『傳法流通繪』(所謂『四卷完本の外題は『本朝祖師傳記繪詞』となつてゐる)をもつて嚆矢とすることが、その後の研究において明白となるに至つた。ここに謹んで訂正する次第である。周知のように『傳法流通繪』は繪詞形式より成立つものであり、詞書として綴られた法然の傳記や法然の詞に對應して、その内容を繪畫的に表現した繪をもつ點で、先に指摘した傳道・教化的意圖を十分に發揮し得る性質をもつものである。かかる『傳法流通繪』が成立する以前に成立したと認められる『源空聖人私日記』は、法然の詞を全然引用してゐないのではないが極少數であり、法然の詞を紹介することよりも、むしろ法然の生涯の出來事、いな偉大なる宗教家としての法然を紹介することに主眼がおかれてゐるようである。亦『私日記』とならんで『傳法流通繪』に先立つて成立したと認められる『法然上人傳記』(醍醐本)はその内容の性質上、「一期物語」等の傳記に主眼をおいたものと、「禪勝房との問答」等の教義内容に主眼をおいたものとに區分し得るから、おおむね傳記と教義とがみずからの境界線を保持しつつ併存してゐるようであるが、實のところ前者は「一期物

語」という題名の示すように、すべて法然がみずからの生涯について物語った詞の集録であるわけである。従つて『醍醐本』一部一巻は傳記と教義と言う内容的相違をもちながらも、法然の詞を集録したものであることが知られる。かく論じたる時、各種の法然上人傳成立の歴史において、『傳法流通繪』がはたした歴史的役割が首肯されるであらう。即ち『傳法流通繪』の作者耽(湛)は、既成の『私日記』・『醍醐本』という兩つの異つた編纂意圖のもとにつくられた傳記をふんまへながら、それらを止揚した新しい編纂意圖をもち、加うるに、法然傳に始めて繪詞形式を使用して、内容、形式ともに新たなタイプの法然傳を成立せしめたのであつた。

しからば『傳法流通繪』の編纂意圖を繼承するものとして、いかなる傳記をあげることが出来るであらうか。即ち『法然上人傳繪詞』(琳阿本)、『法然聖人繪』(弘願本)、『拾遺古德傳』、『法然上人傳記』(九卷傳)、『法然上人行狀繪圖』(四十八卷傳)等をあげることが出来る。このことは數多い法然の傳記の大多數が、『傳法流通繪』の編纂意圖を繼承していると言ふことを意味するものであり、その創始者としての耽(湛)空のアイディアと彼の編纂にかかる傳記との歴史的意義を決定づけるものである。かく『琳阿本』以下の法然傳が『傳法流通繪』の編纂意圖をうけついでいると言つても、各傳記一部に占める生涯の出來事に關する詞書と法然の詞とのバランスはみな異つてゐる。このバランスに關係して次のようなことが考えられる。量的に言つて生涯の出來事に關する詞書が法然の詞をうわまわる場合(A)と、そのバランスが逆な場合(B)、さらに兩者が均衡をたもつ場合(C)との、三つの場合が考えられる。各種の傳記を通覽してみても(B)の場合はあり得ないようであるが、おおむねその成立が降るに従つて(C)の方向へむかつてゐる。このことは法然傳成立史的視野に立つて、生涯の出來事に對する詞書と法然の詞とのバランスを考える時、(A)から(B)へ、あるいは(A)から(B)、さらに(C)へという方向をたどることなく、ただ(A)から直接(C)の方向

へという経過をたどっていることが伺われる。

なお傳記作者の編纂意圖に關して、ただ法然の傳記と法然の詞とを紹介するだけにとどまらず、その裏に法然の詞をかりて、——勿論法然と無關係であらうはずはないが、他のなにものかを伝えようとする意圖がはたらいでないだろうか。純粹に法然の傳記とともに法然の詞を紹介しようとする編纂意圖以外に、たとえばある特定の人物と法然とのつながりを特に強調しようとするような傾向はありはしないだろうか。たとえば——これは法然の詞として掲げられたものではないが『弘願本』卷第三第二段に

これらの次第みな九條の入道殿下の御はからひなり。〔中略〕この念佛宗は一向九條殿の御ちからにて上人御建立ありけり。選擇集も九條殿御勸進、遠流の時ことさら九條殿の御沙汰にて土佐へは御代官をつかはして上人をはわか所領讃岐におきまいらせ給ける。めしかへされ給事も、九條殿御病惱の時、善知識のためなり。

と言っているが、これによると『選擇集』の撰述と配流の轉地とは別としても、法然が後白河法皇に『往生要集』を進講したことや隆信が法然の眞影を寫したこと（本文に言う「これらの次第」とはこの二つを指す）も、さらに淨土一宗の建立、遠流の赦免もことごとく九條兼實のはからいによるものとなしている。それらの歴史的事實なるか否かは別として、ともかくかくまでも強く九條兼實を法然に結びつけていると言うことは、ある意味で法然を動かした人物としての九條兼實をクローズアップしようとする傳記作者の意圖が、はたらいではないとは誰れが保證し得ようか。そうした意圖をもつものとして次の詞をあげることが出来る。即ち『琳阿本』の卷第四第七段に

念佛の人おほしといへとも 關東には熊谷、…鎮西には聖光房…淨土の教門に入しより、…他宗をのぞまざる人なり。就中聖光房…は一山の同侶猶契あり 況證眞法印の…門人なり。かの法印は源空か甚深の同侶、後…世菩提を契たりし人の弟子にてありしか、…源空か弟子になりて八ヶ年かあひた受學せし…人也云云

と、法然の門侶多きなか、京都を中心とした地區を故意にさけたのか否か不明であるが、ともかく關東と鎮西の二地區をのみあげて熊谷と聖光房の二人をクローズアップし、加うるに、天台宗比叡山における「甚深の同侶」であつた證眞の弟子聖光房と言うように、聖光房をことさらに法然と深いつながりがあることを讀者に強く意識せしめようと試みている。こうしたところに『琳阿本』の傳記作者はただ單に法然の傳記と法然の詞を傳える以上に、聖光房と言う特定の人物を、法然の正統をつぐ繼承者であることをも披露せんとする意圖の伏線であることを見逃すことが出来ない。同傳の卷第五第五段に、

汝は法器の仁也。…我立するところ此書をうつしてよろしく…末代にひろむべし

と言う詞を、法然の詞として記載するにいたつたのは、そうした傳記作者の意圖のあらわれと見るべきである。かかる考察にして誤謬なしとするならば、傳記のなかに持ちこまれる法然の詞は、傳記作者の編纂意圖が大きく作用することを示唆するものである。さらにそうした傳記作者の意圖はみずからの立場、數多い法然門弟のどの系統に屬するかを裏書きするものであり、他面亦その背後に、法然滅後における彼の門弟間の派閥とその勢力の消長を讀みとることさえ出来るであらう。

〔註〕

(1) 拙稿『法然聖人繪』に引用された法然の詞(『東山高校研究紀要』第八集所收)、同『法然聖人繪』に關する諸問題(『佛教文化研究』第十一號所收)

## II

第二に問題視されることは、各種の法然傳がどのような法然の詞を紹介したであらうかと言うことである。今左

に二覽表を掲げてその問いに答えるとともに、他傳の傳承をも併せ指摘しようと思う。

(I) 『傳法流通繪』にあらわれた法然の詞

合 計	項 目												卷數	琳阿本	弘願本	古德傳	九卷傳	四十八卷傳
	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1						
	母に登嶺の決意を告ぐ 東大寺勸進職辭退の詞 念佛は自行のつとめ 無品親王の問いに答う 七箇條起請文 元久元年の起請文 結縁は順逆、引接人をきらわず 常の詞—汝好持是語の文 塩飽の西忍に念佛を勸む われもと天竺に在り われ極樂に在りし身 女人往生について												1	二—一	一—五	一—六	一上—五	二—三
	4	4	4	3	3	3	2	2	2	2	2	1	3—八	二—五	三—八	三—六	二上—七	三十—四
	9	八—三	八—三	七—一	六—三	六—三	五—六		五—二									
	5 + (1)	高田本下			三—四			三—一		三—八								
	8	四—一	八—七	八—七			五—八	六—二	五—五									
	11	四下—五	七下—一	七下—一		二上—一	六上—一	五上—三	五上—四	二下—八	二下—四							
	9	十八—三	三十七—一			二十一—一		三十一—二	三十一—一	十三—一	十—四							

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

〔Ⅱ〕 『法然上人傳繪詞』にあらわれた法然の詞

合 計	27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13																	項 目
	師の皇圓についての物語 明遍とその問答 觀經疏を三返讀んで自身往生を決定す 師の寂空と觀佛と稱名の優劣を論ず 顯眞との問答 聖光房は後世菩提を契りし證眞の弟子 東大寺にて惡僧の問いに答う 三昧發得の境地 二祖對面 法器の仁、聖光房に選擇集を授く 流罪にあたり西阿との問答 流罪にあたり信空との問答 一念義停止狀 臨終數日以前における弟子との問答 隨蓮との問答																	
15	九一六	八一三	七二七	六一五	六一五	五三三	五三三	五一一	四一七	三一九	三一五	三一四	三一二	二一五	卷・段數			
3+(1)	高田木下					二一一							二一六	二一七	弘願本			
12	九一八	八一七		七一二	七一二		三一	五一六	四一一		四一二	三一二	三一	四一四	二一三	古德傳		
15	八下一二	七上一二	六下一六	六上一	六上一	三下一三	一下一	三下一	二下一六	三下一四	二下一五	一下一十	一下一十	二上一五	五下一三	九卷傳		
13	二十一	三十七一	二十九一五	三十三一二	十三一三	四十六一	七一五	七一六			四一二	六一	六一	十六一三	三十	四十八卷傳		



〔Ⅲ〕

『法然聖人繪』にあらわれた法然の詞

項	目	卷・段數	古德傳	九卷傳	四十八卷傳
28	浄土の九品差別について	二二二			
29	聖光房に三重念佛を説く	二二三			四十六―一
30	源空の念佛は阿波の介の念佛と同じ	二二三			十九―一二
31	かわ屋で申す念佛	二二四			
32	源智に一枚起請文を授く	二二六		七下―四	四十五―一
33	禪勝房に聖道・浄土の二門を説く	二二八		四下―二	四十五―二
34	禪勝房に信と行とを説く	二二八			二十一―二
35	源空は明遍故に念佛者となる	二一九			
36	鎮西の修行者に對し、觀念すべからざることを説く	(二) 三二五		三下―六	二十三―二
37	天に仰ても、地に臥ても悦	三一四			二十一―二
38	室で修行者の問いに對し、三心具足すべきことを説く	四一八	七一六		
39	塩飽の西忍に對し、稱名は往生の翼と説く	四一九	七一七		
40	塩飽の西忍に對し、自力他力を説く	四一九	七一七		
41	決定往生の人に二のしなあり	下卷	八一五		
合 計		13+(1)	3+(1)	3	7
					『高田本』使用

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

〔Ⅳ〕 『拾遺古德傳』にあらわれた法然の詞

項 目		卷・段 數	九 卷 傳	四十八卷傳
42	隱遁の志を師の皇圖にのぶ	二―二	一下―三	三―五
43	我が朝傳來の聖教傳記目錄を一見す	二―四	一下―五	五―四
44	往生要集を先達として淨土門に入る	三―一		
45	東大寺における説法――三部經に付たる事	四―一		
46	吉水の房で靜嚴法印と問答	四―三		十三―二
47	白河の房における説法（耳四郎縁の下で聽聞）	四―五		
48	公胤が選擇集を難するのを破駁す	六―六		四十一―一
49	一向專修の義を難するのを破駁す	六―九		四十一―一
50	われ淨土宗をたつる意	六―九		六―六
51	念佛往生についての問答	六―十	四上―二 四上―二	六―六
合 計		10	4	7

この一覽表によつて知られるように、『傳法流通繪』には通算十二種の法然の詞が紹介され、『琳阿本』はこの『傳法流通繪』から九種の法然の詞を傳承していることが知られるとともに、新たに十五種の法然の詞を加え傳道、教化の意圖を一層明白にうち出すに至つた。さらに『弘願本』は『傳法流通繪』・『琳阿本』から通算八種、さらに『弘願本』の殘闕の箇處を『法然上人傳法繪』（高田本）をもつておぎなえば二種の詞を追加し得るから、合計十

種の詞を傳承していることが知られるとともに、新たに十三種の詞——『高田本』をもつておぎなえばさらに一種の詞を追加し得るから、通算十四種の詞を加えたことが知られる。さらに『古德傳』は上記の三つの傳記から二十四種の詞を傳承し、新たに十種の詞を加え、『九卷傳』は上記四つの傳記から三十二種の詞を傳承し、『四十八卷傳』は上記五種の傳記から三十六種の詞を傳承していることが、あきらかにされるわけである。従つて『傳法流通繪』、『琳阿本』、『弘願本』・『古德傳』の四つの法然傳は、通算五十一種の法然の詞をもつてことになる。これから各種の法然傳にもちこまれた法然の詞の出據については〔Ⅲ〕において指摘するように、それら五十一種の大半の出據をあきらかにし得るが、なかには出據のさだかでない法然の詞のあることを忘れてはならない。たとえば

上人かわ屋にて御念佛ありけるを ある…弟子いさめ申ければ…不淨にて申念佛のとかはらは…めしこめよかし彌陀の淨土へ  
という、『弘願本』卷第二第四段の詞をあげることが出来る。この法然の詞は既に指摘したように、寡聞にして  
いまだその出據を見出し得ないもの<sup>(1)</sup>の一つとして夙に著明なものである。

しからば出據をさだかにし得ない法然の詞が、法然傳のなかにもちこまれていると言うことは、一體いかなることとを意味しているのであろうか。このことを詮索するに先立つて、傳記作者みずからが編纂する傳記のなかに法然の詞をもちこむ場合、そのもちこまれた法然の詞は既成の語録のなから、その編纂意圖なり、みずからの趣向にもとずき、それをみだし得る法然の詞をぬきとつて、傳記のなかへさしはさんだのであろうか、否かという、言わば法然の詞が傳記のなかにもちこまれるまでの経緯を考えておく必要があると思う。勿論傳記作者が既成の語録のなから採取した場合もあるし、亦逆にたとえ語録に收められていなくとも、みずからが傳承したものを使用した場合もあると考えられる。このなか前者については、たとえば既に指摘したように『弘願本』卷第四第八段の「室

において修行者の問いに對して答」えられた三心具足のことや、同卷第九段「讚岐鹽秋<sup>しほあき</sup>の地頭の館にて入道西仁<sup>さいに</sup>の問いに對して答」えられた自力他力のこと等は、あきらかに『醍醐本』の「或時遠江國蓮花寺住僧禪勝房參上人奉問種々之事 上人一々答之」(これに十一箇の問答あり。前者はその第十一番目、後者は第十番目の問答に相當する。)及び『西方指南抄』下本の「或人念佛之不審聖人に奉問次第第一」(これに十一箇の問答あり。『醍醐本』の場合と同様、第十一及び第十番目の問答に相當する。)に出據をもつことが確認される。ただし語録に禪勝房の問い、あるいは或人の問いとなしているものを西忍の問いに切りかえた點のみが相違している。かかる點で傳記作者はこれらの語録のなから、この法然の詞を採取し掲載するに及んで、あえて問者を變更したものと推定されるわけである。亦後者については、たとえば『傳法流通繪』卷第三の

上人つねに人にむかひて唱たまへる文云 佛告阿難汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名<sup>云々</sup>以之上人私曰 雖聞名號不信之如不聞之 雖信之不唱之如不信之 只つねに念佛すべし

と言う法然の詞は、『醍醐本』や『西方指南抄』のような語録の中に見出すことが出来ないが、傳記作者が直接聽聞したか、あるいは他から傳承したか不明であるが、ともかく傳記作者みづからが傳承していた法然の詞を掲載したものであらうことが推定されるわけである。なおこうした問題に附隨する問題をとりあげてみようと思う。即ち『弘願本』卷第二第六段に「勢觀房にさずけてのたまはく」として、所謂『一枚起請文<sup>3</sup>』の本文だけを掲載しているが、これは『醍醐本』にも、『西方指南抄』にも編入されていない法然の詞である。そもそもこの『一枚起請文』は「勢觀上人敢て披露せず。一期の間、頸にかけて秘藏せられける」(『九卷傳』卷第七下第四段)と、傳えられていることによつても知られるように、さらに亦勢觀房と密接な關係のある『醍醐本』に掲載されていないことから首肯されるように、法然入滅後早い時期においてこれの公開をはばかり、傳書として取り扱つていたよう

ある。望西樓了慧は『黒谷上人語燈錄』(文永十二年一二七五正月完成)のなかに収めたが、法然傳としては『弘願本』の外に、法

然入滅の後百年にして成立した『九卷傳』及び、それと密接な關係をもつ『四十八卷傳』の二つ傳記がこれを掲載しているのである。このことは『傳法流通繪』のように『私日記』につづいていち早く成立した傳記は、この『一枚起請文』がいまだ傳書としての扱いを受けていたため、公開されていなかった關係上掲載し得なかつたことを意味する。従つてこのような場合は、語録や傳記のなかに收録・掲載される時期が遅れることを認めざるを得ないわけである。

ついで法然の詞の出據がさだかであるか、否かと言うことは信用度、信頼感にかかわる。一應出據がさだかであると言うことは、信用度が濃い感じがするのに反し、逆の場合は稀薄な感じのするのは當然のことであろう。さて後者の場合、先づ考えられることは傳記作者が作つた法然の詞ではなからうかという疑問がもたれる。この作られた法然の詞にも二種の區別をたてるべきである。即ちある出來事をより具體的に説明するために、傳記作者が法然の詞を作る場合であつて、その出來事とは歴史的事實であること、他の一つは歴史的にみて事實無根の場合とがある。たとえば前者について

大師釋尊は十九の御年　父の大王にしひ給て　ひそかに王宮をいてたまひ　今小童は　生母にいとま申て　二親を佛道に入  
たてまつらん　夫流浪三界中　恩愛不能斷棄恩入無爲　眞實報恩者文と承は　今日よりのち　こひしくゆかしく我をすて、う  
らめしとおほしめさるな　三河守大江定基は　出家して大唐へわたり侍し時は　老母にゆるされをかうむりてこそ　彼國にして  
圓通大師の號をかうむり　本朝の名をあげ給しか　ゆめ／＼この重をこそ　ちゝの形見として朝に觀へ　暮に呢ひん事をわすれ  
て　ふかくみちひく師とならん事をおほしめせ

と言ふ一文が『傳法流通繪』卷第一に掲載されているが、事實、法然は生母秦氏に登嶺の決意をのべたことであらうが、はたしてここに掲載されているようなことを述べたであらうか。傳記作者がそうした歴史的事實——勿論、『醍醐本』所收の「別傳記」に言う「上人慈父云 我有敵 登山之後聞打敵可訪後世」と言う記事や、『徹選擇集』卷上の「世人皆有因緣發道心也。所謂別父母兄弟 離妻子朋友等也。然源空無指因緣法爾法然發道心」という法然の詞を採用して、父時國の死去以後に登嶺したことを肯定すれば別であるが——にもとづいて、それを讀者により感銘的に傳えようと言ふ意圖から、法然の詞として綴つたものであらうと推定しうる。亦後者については、たとえば既に指摘したように

上人したいして云 貧…道もとより山門の交衆をやめて 林藁の…幽栖をよミする事は…しつかに佛道を…修行して順次に生死をはなれむかため也…もし大勸進の職にをらは劇務萬…端にして自行さためてすゝみかたからむか…自行すゝますは往生とけかたからん…いまにをきてはひとへに淨土の法をのへ…自のためは專称名の行を修して この二の…ほかには他のいとなミならむと思ふと云云

と言ふ、『琳阿本』卷第三第八段に掲載されている東大寺勸進職辭退の詞をあげておこう。

さらに出據がさだかである場合ということをもう少し嚴密にして置こう。即ち出據がさだかであると言ふことは、傳記にもちこまれている法然の詞が、現存する『醍醐本』等の語録やその他法然門侶の著作のなかに見出し得る場合のことを指すのである。このことは必ずしも見出された法然の詞を收録している語録や門侶の著作のなかから、傳記作者が採取して傳記にもちこんだことを意味しない。そうした場合が皆無とは言い得ないことは當然であるが、なかには傳記作者がなんらかのかたちで傳承していたものを、傳記にもちこんだ場合もありうるわけであ

る。なぜならば、法然の語録や門侶の著作が書寫によつて流布<sup>(6)</sup>したのであるから、そう容易に手にし得ない狀況下に、傳記作者がおかれていることを豫想しなければならないからである。従つて今日その出據をさだかにし得るすべての法然の詞をもつて、既成の語録から採取したものであると判斷することは當を得ないであらう。ともかく出據をたしかめ得る法然の詞のなかには、その傳記の成立年代が降つてくると、法然門侶——聖光房や良忠の著作によつたものとおぼしきものももちこまれている。この類の法然の詞には法然とその門弟——特定のある人物との深いつながりを示すものが多く、勢い法然門弟中における特定の地位を高く評價する證據になりがちである。このことは傳記作者の編纂意圖と深いつながりがある點、既に〔I〕において指摘した通りである。

かく法然傳にもちこまれた法然の詞の出據をあきらかにすると言うことは、その傳記の成立年代を推定する上に重要な參考となるからであり、特に近年とみに活潑化した法然の傳記そのものの研究において、その傳記にもちこまれた法然の詞に對する検討を十分こころみないで、その成立年代などを推定しようとする傾向が強い現段階にあつては、とりわけその必要性が強く感じられるのである。

(1) 拙稿「法然聖人繪に關する諸問題——特に法然の詞を中心として」(『佛教文化研究』第十一號(一九六二年)所收) この拙稿においては特にこの詞の成立する教理的・歴史的背景をあきらかにしておいた。

(2) 拙稿「法然聖人繪に引用されている法然の詞」(『東山高校研究紀要』第八集(一九六二年)所收)

(3) 所謂「一枚起請文」と言う名稱は最初からかく名付けられたのではなく、名稱にいろいろな變遷のあることを忘れてはならない。拙稿「法然聖人繪に關する諸問題——特に法然の詞を中心として」(『佛教文化研究』第十一號所收)

(4) 『傳法流通繪』の作者軌空は二尊院の湛空であると言われているが、湛空が和歌をよくしたことは『古今著聞集』卷第二釋教の項に見えている。彼がかく和歌に堪能なことは『傳法流通繪』の上にも見出し得る。即ち卷第一の「かたみとはかなきおやのとめてしこのわかれさへまたいかにせん」等の和歌は湛空の作と思われる。そうした創作性豊かな湛空の人

となりを知るならば、登嶺の決意の詞も亦彼の作としても不思議ではない。

(5) 三田全信氏稿「定明夜襲の疑點について」(第三回淨土教學大會發表概要)

(6) 拙稿「法然聖人繪に關する諸問題」(『佛教文化研究』第十一號)

(7) 『醍醐本』一期物語は行觀(一二三四寂)の『選擇本願念佛集秘鈔』卷第一等に引用している點からその流傳の一端を知り得るが寡聞にして刊本のあることを聞かない。さらに『西方指南抄』には康元二年(一二五七)親鸞八十五歳の時の自筆本が存するが、その開板は萬治四年(一六六一)であり、ずつと後世のことに屬するのである。亦『黒谷上人語燈錄』には元亨元年(一二三二)刊がある。

書寫本にくらべて比較的流布し易い刊本の成立が、早いものでも法然入滅後百年を過ぎるのであるから、法然の語録が容易に手にしがたいことが知られるであろう。

(8) 田村圓澄氏著『法然上人傳の研究』第一部第三章法然傳の系譜(一九五六年刊)や、井川定慶氏著『法然上人繪傳の研究』(一九六一年刊)等をあげることが出来る。

### III

〔A〕類 『醍醐本』所收「一期物語」に出據を求め得るもの

〔15〕

醍醐本	私日記	琳阿本	古德傳	九卷傳	四十八卷傳
但於百即百生行相者 已謬道緯善導釋委不 述之 是故往生要集 爲先達而入淨土門					
		凡夫出離の要道のた めに經藏に入て 一 と云	予、往生要集を先達 として淨土門に入也	此(往生要)集には偏に 善導和尚の釋義をもて 指南とせり	惠心の往生要集、も はら善導和尚の釋義 をもて指南とせり これにつきてひらき
		切經五遍披見之時	其後黒谷の報恩藏に		



見給に

善導の疏には亂想の凡  
夫の釋には亂想の凡  
夫 稱名の行により  
て順次に淨土に生ず  
へきむねを判して  
凡夫の出離をたやす  
くすゝめられたり  
藏經披覽のたひにこ  
れをうかふといへ  
とも とりわき見給  
こと三遍つるに

善導の疏には亂想の凡  
夫稱名の行によりて  
順次に淨土に生へき旨  
を判して凡夫の出離を  
たやすくすゝめられた  
り とりわけひらき見  
むと思ひて 別して見  
る事三返 前後合せて  
八返 時に

入て一切經披覽五遍云云  
のとき 光明寺の觀  
經義をひらきたまふ  
に 極樂國土を高妙  
の報土とさだめて往  
生の機分を垢障の凡  
夫と判せられたる義  
理をみるに 奇異の  
思やうやく動て 別  
してまた彼疏を三遍  
披覽したまふに 第  
二遍にいたるまで  
は いまたその宗義  
を得ず 斯廻本宗の  
熱心を擲て聖道の教  
相になつむ故也 第  
三遍に至て

善導觀經の疏四卷披  
見し給に 極樂國土  
を高妙の報土と定  
て 往生の機分を垢  
障の凡夫と判せられ  
けり 爰に奇異の思  
をなして 別して又  
彼の疏を三遍ひらき  
見るに 第四卷にい  
たりて

觀奧旨二反 拜之時  
者往生猶不易 第三  
返之時

問此宗奧旨 於善導  
二反見之思往生難  
第三反度

一心專念彌陀名號行  
住坐臥不問時節久  
近 念々不捨者是名  
正定之業順彼佛願故  
と云へる文に付て

亂想之凡夫 不如稱  
年來所修の餘宗をな

得亂想凡夫依稱名行

つふさに本宗の執情

一心專念彌陀名号 行  
住坐臥 不問時節久  
近 念々不捨者是名正  
定之業 順彼佛願故の  
文に至りて 忽ち本願  
の正意稱名にあり 是

一心專念彌陀名号  
行住坐臥不問時節久  
近 念々不捨者是名  
正定之業 順彼佛願  
故の文にいたりて  
末世の凡夫彌陀の名

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

可往生之道理 但於 名之一行 是則濁世  
自身出離已思定畢 我等依怙 末代衆生

生之出離令開悟<sup>記</sup>  
況於自身得脫乎  
けすて、ひとへに

を捨て 一心詳覈の  
時 ふかく淨土の宗 離の肝心なしと見立給  
義を得たり 但自身 て 我すてに此道理を  
の往生はすてに決定 得たり 自身の出離に  
し畢ぬ 他のために おきては思定つ 他の  
此法を弘通せんと思 爲に此法をひろめんと  
給に 若佛意に合哉 おもふ所存の義 佛意  
否 心勞 に叶や不叶やと思ひわ  
つらひて

この〔15〕の詞には法然をして開宗にいたらしめた、所謂開宗の文が含まれている。對照表によつて知られるように、開宗の文と言われる「一心專念」の文を、この詞にもちこんだのは『琳阿本』をもつて嚆矢とするようである。しかも『琳阿本』は『觀經疏』の卷數まで明示しているのである。『琳阿本』のように卷數をあげないまでも、「一心專念」の文を傳承して掲載しているのは、『九卷傳』と『四十八卷傳』とである。しかも『琳阿本』をのぞく他の傳——『私日記』は文章簡略にすぎるので一應はふいておきたい——は、すべて『往生要集』の内容に關する法然の見解と法然との關係とをもたせてこの詞を物語つてゐる。しかも『琳阿本』と『四十八卷傳』をのぞく他傳は、この詞に續いて善導との夢中對面を掲載して、惠心の『往生要集』披覽から始つた物語に終止符をうつに至つてゐる。しかるに『四十八卷傳』は、「承安五年春、生年四十三たちところゝ餘行をすてて、一向に念佛に歸し給ひにけり」と結んで、夢中における二祖對面の記事に結びつけていないが、『琳阿本』は、對照表にかかげた文の始めに「高倉院の御宇安元元年、行年四十三の時」という一文を置いているのである。このことは『琳阿本』の

構成が『四十八卷傳』に影響を及ぼしていることを物語るものでなからうか。さらに内容的にみて『九卷傳』や『四十八卷傳』にあつては、「淨土に生」れると言つた場合、もはや『琳阿本』や『古德傳』が、「極樂國土を高妙の報土と定て」と言うように、その淨土を「報土」と明記しなくても通じうる客觀狀況のあつたことを認めなければならぬ。又『琳阿本』と『四十八卷傳』とをのぞく他傳は、すべてこの「一心專念」の文によつて、「自身の出離」・「得脱」・「往生」——この術語の變遷にも興味があるが——を思い定めたことを物語っている。かくして諸傳が傳承しているこの詞は、その出據を『醍醐本』一期物語に求めることができる。

[21]

醍醐本	私日記	琳阿本	古德傳	九卷傳	四十八卷傳
眠夢中 <sup>ルノミ</sup> 紫雲大 <sup>ムサ</sup> 聲 <sup>コエ</sup> 覆 <sup>フ</sup> 日本國 <sup>ニッポン</sup> 從 <sup>ヨリ</sup> 雲 <sup>クモ</sup> 中 <sup>ナカ</sup> 出 <sup>デ</sup> 光 <sup>ミツ</sup> 從 <sup>ヨリ</sup> 雲 <sup>クモ</sup> 光中 <sup>ミツナカ</sup> 百寶色鳥飛 <sup>ヒャクホウシキトリトビ</sup> 散充滿 <sup>サンジュウマン</sup>	暫伏寢之處 <sup>シヤクインノトコロ</sup> 示 <sup>シ</sup> 夢想 <sup>ムソウ</sup> 紫雲廣大 <sup>ムサクモクワフタ</sup> 雲中 <sup>クモナカ</sup> 出 <sup>デ</sup> 無量 <sup>ムリヤウ</sup> 光 <sup>ミツ</sup> 自 <sup>ヨリ</sup> 光中 <sup>ミツナカ</sup> 百寶 <sup>ヒャクホウ</sup> 色鳥飛散充滿 <sup>シキトリトビサンジュウマン</sup> 虛空 <sup>コウクウ</sup>	又別傳に云 紫雲廣大にしてあまなく日本國におほへり 雲中より無量の廣大の光を出す 白の光の中に百寶色の鳥とひちりて虚空にみてり	夢に見らく 紫雲靈變として日本國におほへり 雲の中より無量の光をいたす 光の中より百寶色の鳥とひける	まとろみ給へる 夢に 紫雲たなひきて日本國に覆 雲の中より無量の光を出す 光の中より百寶色の鳥とひきたりてみちみてり 又高山ありけんそにして西方にむかへり	上人ある夜夢見らく 一の大山あり その峰きわめてたかし 南北長遠にして西方にむかへり 山のふもとに大河あり 碧水北より出て 波浪南になる 河原渺々として邊際なく 林樹茫々として限數を知らず 山の腹にのほりて はるかに西方を見たまへハ 地よりかミ五丈ハかりあかりて空中に一聚の紫雲あり この雲とひきたりて 上人の所ニいたる 希有の思をなし給ところ

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

雲の中より一人の僧出て 上人の所  
にきたり住す そのさま腰よりしも  
は金色にして こしよりかミは墨染  
なり 上人合掌して申給はく これ  
誰人にましますそやと 僧答給は  
く 我ハは善導なりと なにのため  
に 來給そやと申給に 汝事修念佛  
をひろむること 貴かゆへに來れる  
なり との給とみて夢さめぬ

雲の中に僧あり　上は墨染下は金色にて半金色の衣服なり　上人問ての給はく　これは誰にかあると仰られければ　答ての給はく　我はこれ善導なり　汝専修念佛の法をひろむる　故に

雲の中に僧あり。上は墨染下は金色にて半金色の衣服也。予問て云。是爲誰。僧答て云。我是善導也。專修念佛の法をひろめんとす故に其證とならんか。ためにきたれる也。と云。

善導和尚のものです。よりしものは金色にて現しての給はく。汝下劣の身なりといへとも。念佛興行一天下にみたり。稱名専修衆生におよふか故にわれ爰にきたる。善導すなはちわれなり。

于<sub>レ</sub>時登<sub>二</sub>高山<sub>一</sub>忽  
拜<sub>二</sub>生身之善導<sub>一</sub>  
自<sub>二</sub>御腰<sub>一</sub>下者金  
色也 自<sub>二</sub>御腰<sub>一</sub>  
上者如<sub>レ</sub>常 高僧  
云 汝雖爲<sub>二</sub>不  
肖之身<sub>一</sub>念佛興行  
滿<sub>二</sub>于一天<sub>一</sub>稱名  
專修及<sub>二</sub>于衆生<sub>一</sub>  
之故我來<sub>レ</sub>于此  
善導即我也云々

于時昇高山忽奉<sup>ル</sup>值<sup>ニ</sup>生身善導<sup>ニ</sup>從<sup>レ</sup>腰下者念色也從<sup>レ</sup>腰上者如日常人高僧云汝雖<sup>シ</sup>不肖身<sup>タリト</sup>弘<sup>ニ</sup>專修念佛<sup>ニ</sup>故來<sup>レリ</sup>汝前<sup>ニ</sup>我是善導也云々

從<sup>レ</sup>其後弘<sup>ニ</sup>此法<sup>一</sup>  
年々繁昌<sup>シテ</sup>无<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>流<sup>ス</sup>  
布<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>境<sup>ト</sup>也

因<sup>ニ</sup>茲弘<sup>ニ</sup>此法<sup>一</sup>年  
年次第繁昌<sup>シテ</sup>無<sup>ク</sup>  
不<sup>レ</sup>流布<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>ト</sup>也

善導は則是彌陀  
の化身なれば  
群衆の義 佛意  
に協けりとよろ  
こひたまふ

證とならか爲に  
來れる也と

畫工乘臺におほせて ゆめみると  
ころを圖せしむ 世間に流布して  
夢の善導といへるこれなり その畫  
像のちに唐朝よりわたる影像にた  
かハさりけり

〔21〕の詞は所謂善導との夢中における對面に關するものであり、〔15〕に續く詞である。即ち「自身の出離」を  
思い定めたものの、「爲<sup>ニ</sup>他人<sup>一</sup>雖<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>弘<sup>レ</sup>之<sup>一</sup> 時機難<sup>レ</sup>叶<sup>レ</sup>故<sup>一</sup>」〔醍醐本』一期物語〕に煩らつた法然に答えるのがこ  
の〔21〕である。對照表によつても知られるように、『四十八卷傳』は分量的に大きくふくれている。このことは  
この傳記が成立する頃に、この二祖對面をいかに重要視していたかを物語るものである。特に「畫工乘臺におほせ  
て」の一文はこのことを十分に證するものである。又「その面像のちに唐朝よりわたる影像にたかはさりけり」と  
言うは、おそらく俊乘房重源の請來せし影像を指すのであらう。この傳記作者はこの一文を通して、淨土家の師資  
相承をかためる上に一役を荷わしたことであらう。その外、こまかいことではあるが善導の容姿について『醍醐本』  
以下のすべての傳記は、「從<sup>レ</sup>腰下者金色也」という『醍醐本』の描寫を傳承しているが、「從<sup>レ</sup>腰上者如常人」とい  
う描寫は『私日記』のみが傳承し、『古德傳』『九卷傳』『四十八卷傳』は「上は墨染」となし『琳阿本』は上半身  
の描寫を缺いている。かくして〔21〕は『醍醐本』一期物語の詞を傳承するものであることが知られる。

[43]

醍醐本	私日記	古徳傳	九卷傳	四十八卷傳
愍吾朝所来到 聖教乃至傳記 目錄無不一見	摠本朝所渡之 聖教乃至傳記 目錄皆披加一 見了	一切經論 飢を忍て日々に ひらく ひらくことに文字 を暗す 自他宗の章疏 眠 を忘て夜々みる 又古今の 傳記日記和漢の秘書秘傳手 にとり眼にあてすといふこ となし	一切經論 飢をしのひて 日々ひらき 自他宗の章疏 眠を忘てよなよなに見る 其外 古今の傳記日記和漢 の秘書秘傳手に取眼にあて すと云事なし	我朝にわたれる 聖教傳記まなこ にあてすといふ ことなし

[43] は法然がみずから精讀した圖書の範圍について語つた詞である。對照表によつてあきらかなように、『古徳傳』と『九卷傳』は『醍醐本』の詞にもとずいて布衍したのであらう。『醍醐本』は内典についてのみ物語つたようであるが、『古徳傳』等は外典にまでその範圍をひろげている。

[17]

醍醐本	琳阿本	古徳傳	九卷傳	四十八卷傳
問云 今度 何可解脱生 死 答云	今度いかてか生死を解 脱し侍へき 答云 何様にも御計に	今度いかにしてか生死を 出過し侍るへきと 上人 答て云 何様にも御計に	今度いかてか生死を解脱 し侍るへきとの給ふに 上人いかやうにも御計に	このたひいかゝして 生死をはなれ 侍るへきとの給に 上人いかにも御はからひにはすくへ

如何様不可  
過御計

又云 實然  
也 但先達

者若有思定  
旨者示給其

體 爲自身  
者聊有思定

旨 只早遂  
往生極樂也

又云 依順  
次往生難遂

致此尋如何  
輒遂往生耶

答 成佛雖  
難往生易得

也 依道綽  
善導意者

仰佛願力  
爲強緣 故

凡夫生淨土  
と云々

はすくへからず

又云 まことにしか也  
但先達におはしませは  
もし思ひ定給へる旨あ  
らはしめし給へ

その時 自身のために  
は聊思ひ定たるむね侍  
り たゝはやく往生極  
樂をとけむと也

又云 順次往生とけか  
たきよて 此尋をい  
たす いかゝやすく往  
生をとけむや

又云 成佛はかたしと  
いへとも 往生はやす  
し 道綽 善導の御心  
によらは 佛の本願を  
あふひて強縁とするが  
故に 凡夫淨土に生ず  
と云々

はすくへからずと

又云 其條所存なきにあ  
らずといへとも 先達に  
おはしませは 若思定た  
まへる旨あらは示たまへ  
となり 其時上人云 自  
身のためにはいさか思  
定たるむねあり たゝは  
やく往生極樂をとけんと  
なり

座主云 身にきては順  
次の往生いかにも遂かた  
くおほえ侍るによりてこ  
の問をいたす いかゝた  
やすく往生をとけんやと

上人云 成佛はかたしと  
往生は得やすし 道綽善  
導等の御意によらは 佛  
の本願を仰て強縁とする  
かゆへに凡夫淨土に生ず  
と云々

は過へからずと

座主又申されけるは 誠  
に然也 但し先達にまし  
ませは 思定へる旨あら  
はしめ給へと也との給へ  
は 其時 自身の爲には  
聊思定たる旨侍り たゝ  
はやく極樂の往生をとけ  
んと也

座主又申さるゝ様 順次  
の往生遂かたきによりて  
しめてたつね侍り いか  
ゝたやすく往生をとけん  
や

上人こたへ給はく 成佛  
は難しといへとも往生は  
得やすし 道綽 善導の  
こゝろによらは 佛の願  
力を仰て強縁とするゆへ  
に罪惡の凡夫 淨土に生  
ずと云々

からずと

法印申されけるは 先達にましませ  
は きたためて思きため給つるむねあ  
るらむ しめし給へとなりとの給へ  
は

上人自身のためには いさゝかおも  
ひきためたるむね候 たゝはやく極  
樂の往生を遂候へしと申されければ

法印順次の往生とけかたきゆへにこ  
のたつねをいたす いかゝしてこの  
たひ たやすく往生をとくへきや  
との給ふとき

上人答給はく 成佛はかたしといへ  
とも 往生は得やすし 道綽 善導  
の心によらは 佛の願力を強縁とし  
て 亂想の凡夫淨土に往生すと

云云	後座主御言	法然房雖智	惠深遠聊有	偏執失云	人來語此事	予云於不知	之事者 必	起疑心也
後に座主の御詞に云	法然房智惠深遠なりと	いへとも聊偏執のとか	ありと云々	又人來て	是をかたる	わかしらさることいふ	には 必疑心をおこす	なり
後日に座主云	法然房は	智惠深遠なりといへとも	いさゝか偏執ありと云々	或人このことを聖人にか	たる 上人云	わかしらさるを云にはか	ならず疑心おこるなりと	
後に法然房は智惠洋遠也	といへとも	聊偏執の咎	ありと 座主の仰られる	を 上人歸りきゝ給ひて	我しらぬ事を云には 必	疑心をおこす也との給		
のち 法印の給けるは 法然房は智	惠深遠なれとも	いさゝか偏執の失	ありと 上人この事をかへりきゝ給	て	わか知らさる事には	かならず疑心	をおこす事なりとの給	

〔17〕は顯真との問答を物語つた詞である。對照表によつて知られるように、『私日記』や『傳法流通繪』のよ  
うに比較的早く成立した傳記にはなに故か傳承していないのである。しかしこれを傳承した『琳阿本』以下の四傳  
は、おおむね忠實に『醍醐本』一期物語の詞を傳承している。

〔23〕

醍醐本	琳阿本	古德傳	九卷傳	四十八卷傳
對一人弟子述一 向專念義 西阿 彌陀佛云弟子推 參云 如此御義	一人の弟子に對して 一向專念の義をのへ 給 西阿彌陀佛といふ 弟子 推參していは	一人の門弟に對して 一向專念の義をのへた まふ 御弟子西阿 推 參して云 如此の御義	上人の弟子に對して一向專 念の義をのへ給ふに 西阿 みた佛といふ弟子 推參し て 如斯の御義ゆめくあ	また一人の弟子に對して 一向 專念の義をのへ給に 御弟子西 阿彌陀佛推參して かくのこ くの御義ゆめくあるへからす



努々々不可有事  
候 各不可令申  
御返事給云々

上人云 汝不見  
經釋文哉 西阿  
彌陀佛云 經釋  
文雖然存世間譏  
嫌許也

上人云 我雖披  
截頸不可不云此  
事云々

く 如是の御義ゆめ  
くあるへからず候  
をのく御返事を申さ  
しめ給へからすと云々

上人の給はく 汝經釋  
の文をみすや  
西阿かいはく 經釋の  
文はしかりといへとも  
世間の譏嫌を存するは  
かりなり

上人の給はく 我首を  
きらるとも此事はす  
はあるへからすと云々

不可然おほえ侍りと

上人云 汝經釋をみす  
やと  
西阿申て云 經釋はし  
かりといへとも 世間  
の譏嫌を存するはかり  
なりと

上人又云 我たとひ死  
刑にをこなはるとも  
更に變すへからすと  
云々

るへからず候 各々御返事  
を申さるへからすと申けれ  
は

上人曰く 汝經釋の文を見  
すやと  
西阿申さく 經釋の文は然  
といへとも 世間の譏嫌を  
存する斗なりと

上人又曰 彌陀の本願は是  
愚癡暗鈍の輩 罪惡生死の  
類の出離解脱の直路なり  
我くひきらる共 この事い  
はすは有へからすと

上人又の給はく われたとひ死  
刑にをこなはるとも この事い  
はすはあるへからすと

候 をのく御返事を申給へか  
らすと申ければ

上人の給はく 汝經釋の文をみ  
すやと  
西阿申さく 經釋の文はしかり  
といへとも 世間の譏嫌を存す  
るはかりなりと

上人又の給はく われたとひ死  
刑にをこなはるとも この事い  
はすはあるへからすと

〔23〕は流罪をまゑにした法然が、世間の譏嫌なぞものともせず、一向専修念佛の實踐と弘通にかたい信念を示した詞である。〔17〕と同様、『私日記』や『傳法流通繪』には傳承されていないが、『琳阿本』以下の諸傳は、おむね忠實に『醍醐本』一期物語の詞を傳承している。この中、『九卷傳』は「彌陀の本願は……出離解脱の直路なり」という詞をさしはさむ外、『古德傳』『四十八卷傳』は、『醍醐本』以下他傳が「くびきらるとも」と言つてい

るのを、「たとひ死刑にをこなはるとも」とあらためていることが目立つて相違する點である。

〔44〕

醍醐本 古徳傳

是故往生要集爲先達 而入淨土門 此故に予往生要素を先達として 淨土門に入也

〔44〕の詞は既に〔15〕の對照表においても對照されているが、今別に掲げたもので、『醍醐本』一期物語の詞を傳承するものである。『往生要集』を先達とすということは、どう言うことを意味しているであろうか、「於<sub>二</sub>稱名<sub>一</sub>寧<sub>レ</sub>勘<sub>レ</sub>之爲<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>云事顯然也。但於<sub>二</sub>百卽百生行相<sub>一</sub>者 已讓<sub>二</sub>道綽善導釋<sub>一</sub>委不<sub>レ</sub>述<sub>レ</sub>之」と『醍醐本』一期物語に掲載されている詞のごとく、天台僧たる法然をして淨土一宗を開創し、自他ともに稱名行の上に出離を期待するに至らしめた善導とその著は、法然の見る限りにおいてすべて『往生要集』の歸結、趣向としてあるわけであるから、『往生要集』という關門を通じてこそ善導とその著にめぐり遭い得たのである。しかるに『琳阿本』等の傳記は『往生要集』にふれることがあつても、〔44〕の詞をなに故か掲載していないのである。このことは比叡山における天台宗の大先輩としての恵心僧都と、法然との信仰的つながりを廢除しようとする傳記作者の意圖を考慮する必要を痛感させるであらう。法然がみずからの信仰がいまだ確立してない以前のこと、即ち所謂信仰的遍歴と言ふか、そうしたことを掲載することは、善導の上に確立した法然の信仰を伝えるに何等役立つところなしと決斷をくだしたためか、あるいは天台宗をはなれて念佛を宗とした法然を一般民衆に紹介する場合、とりたてて天台宗の

惠心をもち出す必要性を感じなかつたのであろうか。もし前者のごとくであるならば、求道者としての法然が信仰的遍歴ののち、ついに善導に遭遇するまでの所謂求道の苦惱と言つたことを抹消してしまうことになるであらう。又後者のごとくであるならば、現今において惠心作と傳える佛像佛畫(2)の類が多く存すると言ふことの背後に惠心に對する尊敬、信仰が一般民衆の内にあつたことを意味するのであるが、そうした民衆と親しい惠心を法然と結ぶことによつて、より以上傳道、教化の効果をねらい得た筈であるに拘らず、惠心との結びつきを切つたと言ふことは、やはり宗團意識がそうせしめたのであろうか。

[48]

醍醐本

古德傳

四十八卷傳

或云 上人在生時、三井寺貫首大貳僧正公胤作三卷書、破選擇集、名「淨土決疑抄」、其書曰、

園城寺領學法務大僧正公胤選擇集を破せんか爲に二卷の書を造 淨土決疑抄と題す 彼書にことに一向專修の義を難して云

法花有「即往安樂文」觀經有「讀誦大乘句」轉讀法花、生「極樂」有「何

法華に即往安樂の文あり 觀經に讀誦大乘の句あり 法花を轉讀して極樂に往生せんに

一向專修の義を破する人あほかりしなかに 園城寺の長吏 大貳僧正公胤 いまた大僧都なりし時 上人を誹謗して公胤が見たらん文を法然房の見ぬハありとも 法然房の見たらん事の公胤がみぬハよもあらしと自嘆して 淨土決疑抄三卷を記して選擇集を破す 則學佛房を使者として 上人の室にをくらふゝとき 上人かの使にむかひて これをひらき見給に

上卷のハしめに法花に即往安樂の文あり 觀經に讀誦大乘の句あり 讀誦 極樂に往生するににのさまたけかあらん しかるに讀誦大乘の業を廢

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

妨<sup>レ</sup>然<sup>ニ</sup>廢<sup>ニ</sup>讀誦大乘<sup>一</sup>唯  
附屬念佛<sup>ニ</sup>云々 是大錯  
也

取意上人見<sup>レ</sup>之 不<sup>ニ</sup>見  
終<sup>一</sup>指置云 此僧正此程  
之人不<sup>レ</sup>思 無下分際哉  
聞<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>淨土宗義<sup>一</sup>者 可<sup>レ</sup>  
思<sup>ニ</sup>定判<sup>ニ</sup>教權實<sup>一</sup>者 可<sup>レ</sup>  
思<sup>ニ</sup>廢<sup>ニ</sup>權立<sup>ニ</sup>實義<sup>一</sup>覽<sup>上</sup>  
乍聞<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>宗義<sup>一</sup> 枉<sup>レ</sup>理  
以<sup>ニ</sup>法花<sup>一</sup>望<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>觀經<sup>一</sup>往生  
行中事 似<sup>レ</sup>忘<sup>ニ</sup>宗義<sup>一</sup>廢  
立<sup>一</sup>若能學道者 可<sup>レ</sup>謂<sup>上</sup>  
觀經是爾前教也 彼教也  
彼教中不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>攝<sup>ニ</sup>法花<sup>一</sup>  
今淨土宗意者 取<sup>ニ</sup>觀經<sup>一</sup>  
前後之諸大乘經<sup>一</sup> 皆悉  
攝<sup>ニ</sup>往生行<sup>一</sup>内<sup>一</sup> 何法花獨  
殘<sup>レ</sup>之哉 事新不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>望<sup>ニ</sup>  
入<sup>ニ</sup>觀經<sup>一</sup>内<sup>一</sup> 普攝意者  
教爲<sup>ニ</sup>對<sup>ニ</sup>念佛<sup>一</sup>廢<sup>中</sup>之上也  
云云

の妨かあらん 然に讀誦大乘を  
廢して たゞ念佛を附屬すと  
云々 これ大なる謬也と

聖人これを披つゝ こゝにいた  
りてみはてたまはず 閣て云此  
難非也 まづ難破の法 すへか  
らく其宗義を知て後に難すへ  
し 而今 淨土の宗義にくらく  
して僻難をいたさは 誰か敢て  
破せられん 夫淨土宗の意は觀  
經前後の諸大乘經を取て みな  
ことくく往生の行の内に攝入  
せり 其中に なんそ法花經ひ  
とりもれんや 觀經にあまねく  
攝入する意は 念佛に對して廢  
せんかためなり

して たゞ念佛ばかり附屬すといふ これおほき  
なるあやまりなりといへり

この文を見たまひて おハリを見ず さしをきて  
のたまはく この僧都これほとの人とおもハさり  
つ 無下の事なりけり 一宗をたつとき かれは  
廢立のむねを存すらんとおもハるへし しかるに  
法花をもて觀經往生の行にいれらるゝ事 宗義の  
廢立をわするるに似たり もしよき學生ならは  
觀經ハこれ爾前の教なり かのなかに法花を攝す  
へからすとそ難せらるへき 今の淨土宗の心は觀  
經前後の諸大乘經をとりてみなことくく往生の  
行のなかニ攝す なんそ法華ひとりもれんや あ  
まねく攝する心ハ念佛に對してこれを廢せんため  
なり

〔48〕は園城寺長吏公胤が、法然の主著である『選擇集』を誹謗するために作つた『淨土決疑抄』の誤謬について、法然が指示した詞で、『醍醐本』一期物語の詞を傳承するものである。『四十八卷傳』はいかなる資料にもとずいてか『淨土決疑抄』を法然のもとまで届た使者の名を記して、學佛房となしている。

〔49〕

醍醐本

古徳傳

四十八卷傳

或時云 我立一向專修  
義人多謗云 縱雖許諸  
行往生 全不可成念佛  
往生障 何故強立一向  
專念義耶 此大偏執義  
也

抑一向專修の義を難することは公胤のみにあらず 餘人又難じて云 たとひ諸行往生をゆるすとも 往生のさわりとなるへからず 何強に一向專念といふや おほきなる偏執也云

上人かたりての給はく われ一向專念の義をたつるに 人おほく謗してはいく たとひ諸行を修すといふとも またく念佛往生のさわりとなるへからず 何あなかに一向專念の義をたつるや これ偏執の義なりと

答此難は不知此宗限故也 經已云一向專念無量壽佛 故釋云一向專稱彌陀佛名 離釋私立此義者 誠所責難去欲致此難者 先可謗釋尊 次可謗善導 其過全非我身上

如斯難する者は 淨土の宗義をしらざるものなり 其故に 釋尊は一向專念無量壽佛ととき 善導和尚は一向專稱彌陀佛名と釋したまへり 經釋かくのことし 源空もし經釋をはなれて わたくしに義をたては まことに責るところのことし 若人一向專念の義を難せんとおもはし 釋迦善導を難すへし その過またく我身にあらすと云云

かくのことくの難をいたすハ この宗のいはれをしらざるゆへなり 經には一向專念無量壽佛といひ 尺にハ一向專稱彌陀佛名と判せり 經尺をはなれてわたくしにこの義をたてハ 誠にせむるところのかれかたし 此難をいたさんとおもハ、先尺尊を謗し 次に善導を謗すへし そのとかまたくわか身のうへにあらすとそ おほせられける。

一向專修の義を破する人おほかりしなかに  
 蘭城寺の長吏 大貳僧正公胤 いまた大僧都  
 なりし時 上人を誹謗し……

〔49〕は一向專修義に對しての謗難に答える法然の詞で、『醍醐本』一期物語の詞を傳承するものである。即ち法然は『無量壽經』の「一向專念無量壽佛」と善導の『觀經疏』散善義の「一向專稱彌陀佛名」とをもつて、一向專修義の成立根據としなしたことが知られる。この詞は内容的に『選擇集』の三輩念佛往生篇に通ずるものである。對照表によつて知られるように、『四十八卷傳』は三井園城寺の公胤をもつて一向專修義謗難の代表者とみなし、その名をあげている。

〔50〕

醍醐本

古 德 傳

九 卷 傳

四十八卷傳

爰人多誹謗云 雖不  
 立宗義可勸念佛往  
 生 今立宗義事 唯  
 爲勝他也云々

又人難して云 諸教所讚多在彌陀なるかゆへに 諸宗の人師かたはらに彌陀をほめ あまねく淨土をすゝむ このゆへに前代往生の人おほし 此宗をたてすといふとも 念佛をすゝめんに なにの不可あらん ひとへにこれ勝他也と云々

或時云

我立淨土宗意趣者  
爲示凡夫往生也

若依天台教相者 雖

似許凡夫往生判淨土  
至淺薄也

若依法相教相者 判

淨土雖甚深 全不許

凡夫往生也 諸宗所  
談雖異 惣不許凡夫  
生淨土云事

故依善導釋義興淨土

宗時 即凡夫生報土  
云事顯也

聖人聞て云

淨土宗をたつる意は 凡夫の報  
土に生ずることをあらはさんか  
ためなり

其故に天台の教相によらは 凡  
夫の往生をゆるすといへとも  
身土を判すること至てあさし

若法相によらは 身土を判する  
ことふかしといへとも 凡夫の  
往生をゆるさす 諸教の所談  
まことに巧なりといへとも 總

て凡夫の報土に生ずることをゆ  
るさす

若善導和尚の釋義によりて淨土  
宗をたつるとき 僅に一世の念  
〇力によりて 界内麁淺の凡夫  
忽に報土に生ずる義 こゝにあ  
きられし このゆへに別して淨  
土宗をたつと云々

上人談義の砌にて語て曰

我は淨土宗を立る意趣者  
凡夫の往生を示さんか爲な  
り

若天台の教相によれば 凡  
夫往生をゆるすに似たりと  
いへと 淨土を判する事至  
て淺薄也

若法相の教相によれば 淨  
土を判する事甚深なりとい  
へとも 全く凡夫往生をゆ  
るさす 惣而凡夫報土に生  
ずと云事をゆるさす

故に善導の釋義に依て淨土  
宗を興する時 即ち凡夫報  
土に生るといふ事顯るゝな  
り

上人或時かたりてのたまはく

われ淨土宗をたつる心は 凡  
夫の報土に むまるゝことを  
しめさむためなり

もし天台によれば 凡夫淨土  
にむまるゝことをゆるすに似  
たれとも 淨土を判する事あ  
さし

もし法相によれば 淨土を判  
する事ふかしといへとも 凡  
夫の往生をゆるさす 諸宗の  
所談ことなりといへとも ず  
へて凡夫報土にむまるゝこと  
をゆるさる

ゆへに 善導の釋義によりて  
淨土宗をたつるとき すなは  
ち凡夫報土にむまるゝ事あら  
はるゝなり

〔50〕は法然が淨土宗を開創しなければならぬ理由を示す詞で、『醍醐本』一期物語を傳承するものである。對照表の『醍醐本』の段の最初に掲げた「爰人多難云」等の二十七字は、『古德傳』の該當文に對照するために特に

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

配置したものであつて、『醍醐本』における定位置は、対照表の「即凡夫生報土云事顯也」に續く詞である。このことによつても知られるように、『古德傳』は『醍醐本』の詞を配置換えし、さらに別の詞を追加したことが知られる。

[51]

醍醐本

古德傳

九卷傳

四十八卷傳

爰人多誹謗云 雖不立宗義可勸念佛往生 今立宗義事唯爲勝他也云云

若不立別宗者 何顯

凡夫生淨土之義哉

若人來言念佛往生者 是問何教何宗

何師意者 非天台

非法相 非三論 非

花嚴 答何宗何師意

乎 是故依道綽善導

意立淨土宗 是全非

勝他也云々

若又人ありて いまたつるところの念佛往生の義 いつれの教い  
つれの師の意そといは、答へし  
眞言にあらず 天台にあらず 華  
嚴にあらず 三論にあらず 法相  
にあらず た、善導和尚の意に依  
て淨土宗をたつ 和尚はまさしく  
彌陀の化身也 所立の義 あふく  
へし 信すへし またく源空か今

爰に人多く誹謗して云 宗義を不立とも念佛往生を勸むへし 今宗を立こと只是勝他の爲なりと 若別の宗をたてずは 何凡夫報土に生る義をあらはさんや

若人來て念佛往生は 是何の教、何の宗 何の師の心そと問は、天台にもあらず 法相にもあらず 三論にも非す 花嚴にもあらず 何の宗 何の教 何の師の意とか教へんや 故に 道綽善導の意に依て 淨土宗を立てこれ全く勝他の爲にあらずといふ

こゝに人おほく誹謗していはく かならず宗義を立せずとも念佛往生をす、むへし いま宗義をたつる事はたゞこれ勝他のためなるへし 我等凡夫むまるゝ事をえは 應身應土なりとも足ぬへし なんそ強に報身報土の義をたつるやと この義一往ことほりなるに似たれとも 再往をいへはその義をしらさるかゆへなり もし別の宗を立せずは 凡夫報土に生る義もかくれ 本願の不思議も あらはれかたきなり しかれば善導和尚の釋義にまかせて かく報身報土の義を立す これまたく勝他のためにあらす



〔51〕は、淨土宗の開創は道綽・善導兩師の意によるものである、と言う『醍醐本』一期物語の詞を傳承するものであるが、諸傳によつて多少の相異をきたしている。『古徳傳』や『四十八卷傳』にあつては、もはや道綽ははずされて、「善導の意に依」と言うように、善導一師にしほつてゐるのである。又『古徳傳』が「爰人多誹謗云」等の四十三字を闕いているのは、既に「50」において指摘したように二十七字を「50」に配置換えしたためである。さらに『古徳傳』が道綽をはずしていることは『四十八卷傳』と同様であるが、善導を特に「彌陀の化身」と規定していることは、『選擇集』を豫想するものとして注目に値する。又『四十八卷傳』は『醍醐本』に該當する詞のない詞——「我等凡夫むまるゝ事をえば」以下の詞を掲載していることも注目に値する。即ち傳記作者は、法然がこれと新しく淨土宗を立てる所以を、凡入報土という「本願の不思議をあらは」すことに主眼を置いたのである。従つてこのことは、善導はこのことの故に法然によつてとりあげられるに至つたことを示すものである。言葉をかえて言うならば『四十八卷傳』にあつては、その焦點を『古徳傳』が彌陀の化身としての對し、阿彌陀佛の「本願の不思議をはらす」ということに置いているのである。

〔13〕 佛の出世に遭わんとして龍となつた、師皇圓についての物語

〔36〕 鎮西の修行者の問いに對して答う——觀念すべからず

〔13〕、〔36〕はともに『醍醐本』一期物語にその出據を求めうるものであるが、既に拙稿「法然聖人繪に引用された法然の詞について」（東山高校研究紀要第八集 法然上人遠忌特集號所收）において論述したから、その方にゆ

ずつて繁をさけたいと思う。

かく『醍醐本』一期物語に出據を求めうる法然の詞十二種を指摘したが、この中、注目すべき事實として次のことをあげることが出来る。即ち誹謗に對して法然がそれを反駁した〔48〕、〔49〕、〔50〕の詞はすべて『古徳傳』以降に成立した法然傳のなかに収められるようになったことである。又法然が淨土教の信仰の上に活路を見出すまでの経過として等閑視できない〔15〕、〔21〕の詞を法然の繪詞傳にもちこんだのは『琳阿本』が最初なのである。さらに『古徳傳』は『存覺一期記』などによると、わずか十七日という驚くべき短期間に編集されたことが知られるが、且つて法然傳がとりあげなかつた『醍醐本』一期物語に出據をもつ法然の詞を五種も、新たに採用していることは注目に値する。つまりこのことは、『古徳傳』が短期間で成立する背後には、既に數種類の法然傳と語録のあつたことを物語るものでなからうか。

1 『傳法流通繪』卷第二、『法然聖人繪』卷第二には俊乗房重源が宋より善導和尚眞像を請來すと言ひ、『琳阿本』『古徳傳』『九卷傳』『四十八卷傳』には重源が五祖影像を請來したと傳えている。従つて『四十八卷傳』の言う影像とは五祖影像中の善導和尚眞像を指すのであらう。

ちなみに五祖影像のことについて、拙稿「重源の淨土五祖影像請來」(『佛教文化研究』第四號所收の「法然上人傳研究會紀要」四)を参照されたい。

2 京都金戒光明寺藏の山越來迎圖、滋賀西教寺藏の迅雲來迎圖、高野山藏二十五菩薩來迎圖等は、ともに惠心の作と傳えられるが、平安朝後期もしくは鎌倉時代の製作に屬し、けつして眞筆とは言えない。このように惠心は彼の死後、彼の名がかりられる程尊敬され、著明となつたのである。

3 石井教道博士著『選擇集の研究』註疏篇參照

4 『選擇集』第四三輩念佛往生篇の私釋段に、「何乘餘行唯云念佛乎。答曰（中略）一爲廢諸行歸於念佛 而說諸行者准云善導觀經疏中 上來雖說定散兩門之益 望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名之釋意且解之者 上輩之中雖說菩提心等餘行 望上本願意唯在衆生專修彌陀佛名。而本願中更無餘行。三輩即共依上本願故云一向專念無量壽佛也

#### IV

〔B〕類 『醍醐本』所收の「別傳記」・「禪勝房奉問上人答」・「三心料簡」・「御臨終日記」・「三昧發得記」に出據を求め得るもの。

〔42〕

醍醐本	古 德 傳	九 卷 傳	四 十 八 卷 傳
上人聞此由（慈父被打敵畢）師乞暇遁世云遁世之人無智慧候也	或時師に申て云 すでに出家受戒の本意を遂畢ぬ 於今者跡を林藪にのかれんとおもふと 師これを聞てすゝめ誘て云 たとひ遁世すへしといふとも 六十卷を學して後 その志にしたかふへしと	或時師に申て云 すでに出家の本意を遂畢る 今におきては跡を林藪にのかれんと 闍梨の云 たとひ遁世の志ありとも まつ六十卷をよみわたして 後 その本意を遂へしとの給へは	ある時 すでに出家の本意をとけ侍ぬ いまにきては跡を林藪にのかれむとおもふよし 師範の闍梨に申されければ たとひ隱遁の志ありとも まつ六十卷をよみてのち その本意を遂へきよし 闍梨いさめ給ければ
依之始談義於三所 謂玄義一	答て云 我今閑居をねかふことは なく名利の望をやめて し	我いま閑居をねかふ事は なか〈名利の望をやめて 心靜に佛	われ閑居をねかふ事は 永名利の望をやめて しつかに佛法を修學せんたり

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

所 文句一所	つかに佛法を修せんとなり 貴命	法を修學せん爲也 此尤本意也と	この仰まことにしかなりとて 生年十六
止觀一所也 每	本意也といひて 十六歳の春はし	て 十六歳の春より 十八歳の秋	歳の春はしめて本書をひらく 三箇年を
日通三所 依之	めて本書をひらく 十八歳の秋に	に至るまで三ヶ年の光陰をふる	へて 三大部をわたりたまひぬ
三ヶ年亘六十卷	いたるまで 三ヶ年の間に六十卷	に 六十卷の淵源をきはむ	
畢	の玄贖をきわむ		

〔42〕の詞は出家授戒の素懷をとげた十五歳の法然が、師の皇圓に對して隱遁の志を表明し、師のいましめに従ひ十六歳の春から三ヶ年にわたつて天台三大部の勉學にいそしんだことを物語る師との問答である。隱遁の志の表明について、『傳法流通繪』卷第二にあつては皇圓に對してでなく、「久安六年<sup>庚午</sup>生年十八 はしめて黒谷上人禪室に尋いたる 同上人いてむかうて 發心の由來を問給ふ」のに對して始めて表明した記事を掲げ、又『琳阿本』卷第二第六段にあつても『傳法流通繪』と同様な記事を掲げてはいるが、これに先立つ同卷第四段に「まさに大業をとけて圓宗の棟梁たるへしと 度々念比にすゝむれとも さらに承諾のこと葉なくして 忽に遁世の色有」という記事を掲げているのである。對照表によると、遁世の志を皇圓に述べたことは『古德傳』に始るように受けとれるが、實は『琳阿本』に既に記事として掲げられているものを『古德傳』の作者が繼承し、これを問答體に書き直したことが知られるであらう。

この師皇圓がいさめた詞とそれに續く文章は、『醍醐本』別傳記によつたであらうことが對照表によつてあきらかにされるであらう。しかし注意しなければならないことは、『別傳記』にあつては、法然は十五歳登山し、黒谷慈眼房について出家受戒、時に法然の父が「被打敵畢 上人聞此由師乞暇遁世云」とあるように、本國を出る時に

父から聞かされた「我有敵 登山之後聞被打敵可訪後世云々」と言う悲慘なことが事實となつたからには遁世して父の菩提をとぶらうべく、その志を師慈眼房に表明したのである。従つて父の死後登嶺したとなす『私日記』や『傳法流通繪』以下の傳記と異なる所以である。

古 德 傳

靜嚴法印 吉水の坊に來て 聖人に問て云 云何かしてこのたひ生死をはなるへきと

聖人答て云 源空こそたつね申たく侍りつるに この命如何

靜嚴云 決擇の門は誠に然也 出離の道にをきては 智者道心者通世久して

かたく案立する義によるへしと

聖人すこしうちゑみて云 源空にをきては彌陀の本願に乗して往生を期す其外をはしらすと

靜嚴云 我所存これなり 人の義意をきかんために このうたかひをいたすといひて すなわち座をたち侍りぬ

四 十 八 卷 傳

延曆寺東塔 竹林房の靜嚴法印 吉水の禪房にいたりていかゞして此たひ生死をはなれ候へきとの給ければ

源空こそたつね申たく侍れと申けるに

法印又…決擇門はさる事にて 出離の道にをきてハ 智徳いたり道心ふかくましませハ さためて安立の義候らんと申さるれハ 源空ハ彌陀本願に乗して 極樂の往生を期する外ハ またくしることなしと

法印申さるゝ様所存もかくのことし 美言をうけ給て 愚案をかたくせんかためにたつね申所也 但妄念のきおひをこり侍をはいかゞし候へきと

上人のたまはく 是煩惱の所爲なれハ 凡夫のちから及へからす 只本願をたのみて名號を唱れば 佛の願力に乗して往生を得としれり 法印信心決定し 疑念忽にとけぬ往生更にうたかひなしとして 退出し給けり

〔46〕の詞は靜嚴との問答であり、『古徳傳』が始めて傳記にこの問答をもちこんだのである。しかしその出據は『醍醐本』別傳記に「竹林房靜賢奉値上人取念佛信其者一心文義也」と言う記事に求めることができるのであろう。なお『四十八卷傳』は『古徳傳』よりも一問答追加していることが對照表によつてあきらかにされる。

〔28〕淨土の九品差別について

〔38〕室において修行者の問いに對して三心具足を説く

〔40〕鹽飽西仁イノの問いに答えて自力他力のことを説く

〔33〕禪勝房へ與えた聖道淨土二門に關する詞

〔28〕、〔38〕、〔40〕の三つの詞は『弘願本』卷第二第二段及び卷第四第八段・第九段に掲載されているが、『醍醐本』所收「或時遠江國蓮花寺住僧禪勝房參上人奉問種々之事上人一々答之」（この問答に十一あり）にその出據をもつものであり、十一の問答の中第四、第十一、第十の問答を借用して、禪勝房ならざる他の人との問答としたものである。

〔33〕の詞は『弘願本』卷第二第八段に掲載されているが、『醍醐本』所收「三心料簡」にその出據をもつものである。

これら四つの詞については、既に拙稿「法然聖人繪に引用された法然の詞について」において論述したから、今は省略したいと思う。

醍醐本

西方指南抄

私日記

傳法流通繪

琳阿本

同三日戌時 上人  
語弟子云

また正月三日戌の時に  
また正月三日戌の時に  
聖人看病の弟子ともにつけて  
のたまはく

或時聖人相語弟子  
云

病床のむしろに人々問たて  
まつりける 御往生實否如  
何 答云

或時は  
弟子に告て

我本在天竺

われはもと天竺にありて 聲  
聞僧にましわりて 頭陀行せ

我昔有天竺

我本 天竺國に在るとき

われもと天竺にありて 聲  
聞僧にましはりき 頭陀を  
行しき

交聲聞僧常行頭陀

交聲聞僧常行頭陀

交聲聞僧常行頭陀

衆僧に交て 頭陀を行しき

衆僧に交て 頭陀を行しき

其後來本國

しみの

今來干日本國

今日本にして

今日本國に來りて

入天台宗又勸念佛

この日本にきたりて  
天台宗に入て またこの念佛  
の法門にあえり

學天台宗又勸念佛

天台宗に入て かかる事に  
あへり

天台宗にて又念佛

心無苦痛

あへり

をすゝむ 身心に苦痛なく

とのたまひけり

蒙昧忽分明

抑今度の往生は一切衆生結  
縁のため也 我本居せしと  
ころなれば たゞ人を引接  
せんと思

抑我往生は一切衆生の結縁  
のため也 われもと居せし  
所なれハ歸行へし 唯人を  
引導せんと思ふ

〔11〕

醍醐本

西方指南抄

古德傳

四十八卷傳

弟子問云

その時看病の人の中に ひと  
りの僧ありて とひたてまつ  
りて申すやう 極樂へは往生

或御弟子問て云

ある弟子

可令往生極樂哉

可令往生極樂哉

今度の往生決定歟

今度の御往生は決定歟とたつ

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

答云

我本在極樂之身

可然

したまふへしやと申ければ

答のたまはく

われはもと極樂にありしみな

れは さこそはあらむすらめ

とのたまひけり

答て云

我もと極樂にありし身な

れば 定てかへりゆくへ

しと

ね申に

われもと極樂にありし身なれ

は さためてかへりゆくへし

とのたまふ

〔10〕〔11〕はともに病床にあつた法然が建暦二年（一一二二）正月三日、弟子をあいてに語られた詞で、『醍醐本』所收の『御臨終日記』や『西方指南抄』中本所收の『法然聖人臨終行儀』、『私日記』にその出處を見出し得る。今〔10〕を比較對照することによつて、「本者是在極樂世界」の詞を持たない『醍醐本』と『西方指南抄』及び、これを持つと同時にさらに「心無苦痛蒙昧忽分明」の詞をもつ『私日記』の二つの系統に分けることが出来る。『傳法流通繪』は『醍醐本』、『西方指南抄』を繼承し、さらに「抑今度の往生」以下の詞を新たに追加している。これに對して『琳阿本』はやはり『醍醐本』、『西方指南抄』を繼承しながら、『私日記』の「心無苦痛」の文と『傳法流通繪』の「抑今度の往生」の詞を——少し詞を改めているが繼承している。その外『古德傳』はその前半おおむね『醍醐本』の系統を繼承しているが、「今粟散片州の堺に生を受けて念佛宗を弘む。衆生化度のために此界にたひく來き」というように詞を改め、又『九卷傳』はおおむね『傳法流通繪』を繼承しているが、さらに「勢觀上人申さく 先年も此仰侍 抑聲聞僧とは佛弟子の中には何哉と申せし時 舍利佛也と答給ふ」と言う問答を新たに追加していることが知られる。

〔11〕は〔10〕に續くものであるが、『傳法流通繪』、『琳阿本』はこれを闕いているが『古德傳』は〔10〕に先立



つてこの「11」を掲載し、『四十八卷傳』は「10」を繼承しないで、ただこの「11」のみを繼承していることが知られる。今この「11」の「我本在極樂世界之身」という詞は、『私日記』に繼承され、「交聲聞僧常行頭陀」という詞に續いて掲載されていることが知られる。このことは『私日記』の作者が簡略化するために、二つの問答を一つにしたことを物語るものである。

[26]

醍醐本	私日記	傳法流通繪	琳阿本	古德傳	九卷傳	四十八卷傳
十一日辰時 上人起居高聲念佛聞人流淚 告弟子云	十一日辰時 端座合掌念佛不絶 即告弟子云	十一日 上人高聲念佛を人にすゝむとて云	十一日の辰の時 上人おきいて高聲に念佛し給き 愚人みな涙流す弟子等につけてのたまはく	十一日の辰刻に 聖人起居て高聲念佛したまふ 聞人みな歡喜の涙をなかず 弟子等に告てのたまはく	同十一日辰の刻に 上人は起きたまひて西にむかひて高聲に念佛し玉ふに 聞人皆なみたをなかず 門弟等に告て曰	十一日の辰時に 上人をき居給て 高聲念佛し給き 人みな涙をなかず 弟子等につけてのたまはく
可高聲念佛 阿彌陀佛來給也	高聲念佛各可唱	高聲念佛すへし 阿彌陀佛きたり給へるなりと	高聲念佛すへし 阿彌陀佛顯現したまふなり	高聲念佛すへし 此名號を唱ふる者れば本願力によるか 一人もむなしからゆへに 一人も往生す 皆往生すべきなせすといふ事なし	高聲に念佛すへし 阿彌陀佛きたり給へるなり	高聲に念佛すへし 此のミなをとなふれハ 一人として往生せすといふ事なし
唱此佛名者不虛		此佛を恭敬し 名號を唱人 一人も不空	この佛の名號をとなうれハ 一人も往生せすといふ事なし	この佛の名號を稱す 一人もむなしからゆへに 一人も往生す 皆往生すべきなせすといふ事なし		

云歎念佛功德事  
如昔

又觀音勢至菩薩  
聖衆在前 拜之  
乎否

弟子云 不奉拜  
聞之 勸念佛給

觀音勢至菩薩聖  
衆現在此前 如  
阿彌陀經所說  
隨喜雨淚 渴仰  
融肝 盡虛空界  
莊嚴遮限轉妙法  
輪之音聲滿耳

と云て 彌  
陀を種々に  
讃嘆し給ふ  
彌陀常影向  
し給ふ

といひて念佛の功德  
を讃嘆し給事 あた  
かも昔のことし

上人又の給へく

觀音勢至等の菩薩聖

衆現前したまへり

おのゝおかみたて

まつるにやいなや

聖人又云

觀音勢至等の菩薩聖

衆現前したまへり

をのゝおかみたて

まつるにやいなや

と云て 念佛の功德  
を讃嘆し 彌陀の本  
誓を宣説したまふこ  
と 宛も昔のことし

高聲念佛を勸て 念  
佛の功德を種々に讃  
談し給ひて

觀音勢至等の菩薩聖

衆現前し玉へり 各

々拜し奉らすやと

仰られける

とて念佛の功德をほ  
め給事あたかもむか  
しのことし

觀音勢至菩薩聖衆現

してまします おか

みたてまつるやとの

給へは

弟子等不拜  
之哉

と弟子等おかみたて  
まつらすと云々 是  
を聞て いよく念  
佛せとすゝめ給ふ

と弟子等おかみたて  
まつらすと云々 こ  
れをきゝていよく  
念佛すへしとすゝ  
めたまふ

弟子等拜せざる由を  
申せハ いよく念  
佛を勸め給ふ

弟子等おかみたてま  
つらすと申 これを  
きゝ給ていよく念  
佛すへしとすゝめ給

其後 弟子等臨終の  
ために三尺の彌陀の  
像を病床のミきりに

又三尺の彌陀の像を  
病床の右にすへたて

そのち終のため  
に 三尺の阿彌陀の

同日の巳時に 弟子  
等 三尺の彌陀の像

其時 可拜本尊  
之由奉勸  
上人以指々空

此外又有佛

即語云

此十餘年奉拜極  
樂莊嚴化佛菩薩  
事是常也

又御手付五色糸

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

むかへたてまつりてまつりて	云	此佛を拜し給へし と時に上人ゆひを もて空をさしての給 はく	此佛を拜したまふへし とときに聖人 指 をもて空をさしての たまはく	像を病中の砌りに迎 奉りて	此佛を見拜し給へ と申時 上人指をも つて空をさして曰	をむかへたてまつり て
この佛のほかに又お はします おかむや とすなはちかたり ていはく	この佛の外にまた佛 おはします おかむ やとすなはちかた りていはく	此佛の外に又佛まし ます 汝等拜むや否 や	此佛の外に又佛まし ます 汝等拜むや否 や			このほとけのほかに また佛まします お かむやいなやとおほ せられて すなはち かたりての給はくお よそこの十餘年より このかた 念佛功つ もりて極樂の莊嚴を よひ佛菩薩の眞身を おかミたてまつる事 つねの事なり
凡この十餘年よりこ のかた 念佛の功つ もりて極樂の莊嚴を よひ佛菩薩等の御身 を見たてまつること つねのことなり	凡この十餘年より以 來念佛功積て極樂の 莊嚴をよひ佛菩薩を みたてまつることこ れ常恆の事なり	凡十四年より以來 念佛の功積て 極樂 の莊嚴及び菩薩の眞 身拜見する事常の事 なり	然るに年來ハ秘して いはす 今最後に望 める故に示所なりと す			しかれとも としこ ろは秘していはす いま最後にのそめ り かるかゆへにし めすところなりと
しかれとも年來秘し ていハす いま没期 にのそめり かるか ゆへにしめすところ なり	然而人にこれをいは すいま終焉ちかきに あり故にこれをしめ す					又弟子等 佛の御 また弟子等 佛の御
又弟子等佛の御手に	又弟子等佛の御手に	又佛の御手に五色の	又佛の御手に五色の			

可令執之給之由  
勸者

如此事者是大様  
事也云

終不取

同廿日巳時 當  
坊上紫雲聳 其  
中有圓戒雲 其  
色鮮如畫像佛 其中如圖繪佛像

行道入々於處々  
見之 道俗貴賤遠近緇  
素見者流感淚聞  
者成奇異

弟子云 此空紫

五色のいをつけて  
すゝむれば これを  
とり給ハす 上人の  
給ハク 聖人云

如此のことは是つね  
の人の儀式なり 我  
身におひてはいまか  
ならずしもといひて  
にきては不可然

つゐにこれをつと  
り給ハす とつゐに  
取たまはす

廿日巳の時紫雲  
として坊の上に垂  
布せり なかくたな  
びきて又圓形の雲  
あり 圖繪の形像  
の圓光のこくして  
五色鮮潔なり

路次往反の人處々  
にこれを見る

糸を付て取給ふへ  
きよし申時 上人曰  
手に五色のいをつ  
けて とりましませ  
とすゝめ申せば 上  
人の給ハク

如斯の事は大様の  
事なり 但し衆生の  
ためには取へし  
わか身にきては  
いまたかならずし  
も

とて ついにとり  
給ハす

同廿日巳の刻 紫  
雲坊の上に垂布せ  
り 中に圓形の雲  
あり 圖繪の形像  
の圓光のこくして  
五色鮮潔なり 圖  
繪の佛の圓光の  
ことし

路次往還の人 所  
にこれを見る

弟子申さく この  
弟子まふさく この  
此瑞相は御往生の  
近 弟子等申さく  
この

雲已聳 御往生  
近給歟

上人云

哀事哉 爲令一

切衆生信念佛也

云云

同日未時 殊開

同日未時舉目合

眼仰空 自西方

掌 自東方見西

東方見送事五六

方事五六度 弟

返 人皆奇之奉

子奇而問云 佛

問佛在歟

來迎たまふ歟

然也答

聖人答云 然也

に紫雲まさにつらなうへに奇雲まさにつつき給へるなるへし れり 往生のちかつらなれり 往生のちと人々申けるを き給へるかと	上人きゝての給はく あはれなるかなく わが往生はた一切生の瑞相は た一切衆生をして念佛を 信せしめむかためなりと	聖人きゝてのたまはく 哀哉 哀哉 我往 まさん爲なり 命終 は只今にあらず 善 哉く 我往生一切衆生をして念佛を信 せしめ 極樂に引接 りと	未時ことに目をひら きて西方へ見をくり 給こと五六遍 看病 の人聞ていはく 佛 のきたり給かと	未時にあたりて とに目をひらきて西 方へみをくりたま ふこと五六遍 その とき看病の人 問て 云 佛のあらはれた まふかと	上人聞きたまひて云 紫雲は衆生の信を あはれなるかなや わが往生ハ一切衆生 のためなり 念佛の 信をとらしめむかた めに 瑞相現するな りと	又おなしき日の未の 時にいたりて 空を 見あけて目しはらく もましろきたまはさ る事五六反はかりな り 看病の人をあや しみて 佛の來給へ るかとなつね申せハ 然なりとこたえ給
こたへての給はく しかなり	答て云 爾也と	然なりと答給ふ				

〔26〕の詞は建曆二年正月十日ならびに廿日の兩日にわたる、弟子との問答であり、『醍醐本』所收「御臨終日

「記」に出據をもつ點で「16」、「11」に續くものである。

先ず十日にかわされた問答をみてみるに、『私日記』と『傳法流通繪』は、「可拜本尊之由奉勸」、「十餘年奉拜極樂莊嚴」等、「御手付五色糸可令執之給之由勸」の三件を闕いている。今對照表によつて各傳記の異同をみてみるに、『勸高聲念佛』の箇所が「私日記」は「唱此佛名者不虛」及び「歎念佛功德」を闕くが、『琳阿本』・『古德傳』・『四十八卷傳』は「阿彌陀佛來り給へるなり」という詞を追加している。この追加の詞は「彌陀常影向し給ふ」と言ふ『傳法流通繪』のみがもつ詞を繼承し、その位置を前の方に移動させたものであることが知られる。又「觀音勢至菩薩聖衆在前」のところで『私日記』のみが、「如阿彌陀經所說」等の詞をさしはさんでいる。又「可拜本尊之由奉勸」のところで、『琳阿本』以下の四つの傳記が本尊を規定して三尺の彌陀佛とする外、極樂の依正二報を常に拜するという詞のところで、『琳阿本』以下の四つの傳記は、法然のそうした豊かな宗教體驗について、彼自身秘して語らなかつたと言ふことを、法然の詞として追加しているのである。

次に二十日にかわされた問答をみてみるに、『私日記』は「御往生近給敷」という問答を闕き、『傳法流通繪』は全部これを闕いている。その他はおおむね『御臨終日記』に基づいていることが知られる。

[20]

醍醐本		琳阿本		古德傳		九卷傳	
御生年當三十六	長承二年 癸丑誕生 建久	上人自筆の記に云	生年六十有	聖人自筆の記に云	生年六十有	彼自筆の記云	生年六十
九年正月一日	從三山桃法橋	六	建久九年正月一日	やまも、	七	建久九年正月一日	楊梅の法
教慶之許	歸後未時恒	例毎	の法橋教慶かもとより歸て後	橋教慶のもとよりかへりて後	未	恒例の正月七日の念佛これ	

月七日念佛始行之。一日明相少現<sup>レ</sup>之。自然<sup>ニ</sup>甚明也。二日水想觀自然成就<sup>ニ</sup>就<sup>ニ</sup>之。惣念佛七ヶ日之内。地想觀之中。瑠璃相少分見<sup>レ</sup>之。二月四日朝瑠璃地分明現<sup>レ</sup>之。云云。六日後夜。瑠璃宮殿相現<sup>レ</sup>之。云云。七日朝重。又現<sup>レ</sup>之。即似<sup>ニ</sup>宮殿類<sup>ニ</sup>其相現<sup>レ</sup>之。惣水想地想寶樹寶池宮殿之五觀。始自<sup>ニ</sup>正月一日<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>二月七日<sup>ニ</sup>。三十七ヶ日之間也。毎日七万反念佛不退勤<sup>レ</sup>之。依<sup>レ</sup>之此等相現也。云云。

始自<sup>ニ</sup>二月廿五日<sup>ニ</sup>。明處<sup>ニ</sup>開<sup>レ</sup>目。自<sup>ニ</sup>眼根<sup>ニ</sup>佛出生<sup>ニ</sup>。赤袋瑠璃壺見<sup>レ</sup>之。其前開<sup>レ</sup>目見<sup>レ</sup>之。開<sup>レ</sup>目失<sup>レ</sup>之。

未申の時はかり恒例の正月七日念佛是を始行。一日明相すこしく現す。例よりもあきらかなりと云云。二日水想觀自然成就すと云云。惣念佛七ヶ日のうち地想歡の中に瑠璃の相少分これを見る。二月四日のあした地分明に現す云云。六日後夜に瑠璃の宮殿の現す。七日の朝かさねて又現す。則ちこの宮殿をもてあらはれてその相現す。す。すへて水想地想寶樹寶池寶殿の五觀はしめて正月一日より二月七日にいたるまで。三十七ヶ日のあひた。毎日七萬返念不退にこれをつとむ。これによりてこれらの相現す。

申の時はかりより恒例の正月七ヶ日の念佛始行。其間初日に當て明相すこしき現す。第二日水想觀自然成就。すへて念佛七ヶ日のうち水想觀の中に瑠璃相少分これをみる。二月四日の晨。瑠璃地分明に現すと云云。六日後夜に瑠璃宮殿相現す。第七日の晨重て又現す。則ちこの宮殿をもてあらわれて。その相現す。す。すへて日想水想地想寶樹寶殿の五觀はしめとして。正月一日より二月七日にいたるまで。三十七日のあひた。毎日これらの相現すと云云。

を初めおこなふに。一日明相すこし現して自然に甚明也。二日に水想觀自然に成就す。都て七箇日の中に地想觀の中に瑠璃の地いささかあらはる。二月四日の朝。瑠璃の地分明に現す。六日の後夜に瑠璃の宮殿現す。七日の朝重て又現す。正月一日より二月七日に至るまで三十三ヶ日の間。水想。寶地。寶樹。寶池。宮殿等の五觀現す。是則毎日七萬遍の念佛不退にこれを勤によりて見處也。

二月廿五日より。あかき所にしめて目をひらけは。眼根より赤き袋を出生して瑠璃の壺をみる。是よりさきには。目を閉ればこれを見目を開けはこれを失しに。

二月廿八日依<sub>レ</sub>病念佛延<sub>レ</sub>之一  
 万或二万文 左眼其後有<sub>二</sub>光  
 明放<sub>二</sub>又光端赤<sub>一</sub> 又眼有<sub>二</sub>瑠  
 璃<sub>一</sub>其眼如<sub>二</sub>瑠璃壺<sub>一</sub> 瑠璃壺  
 有<sub>二</sub>赤花<sub>一</sub>如<sub>二</sub>寶瓶<sub>一</sub> 又日入後  
 出見<sub>二</sub>四方<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>赤有<sub>二</sub>青寶樹<sub>一</sub>  
 其高无<sub>レ</sub>定 高下隨<sub>レ</sub>意或四五  
 丈或二三丈云云

八月一日如<sub>レ</sub>本七萬返始<sub>レ</sub>之  
 及<sub>二</sub>九月廿二日朝<sub>一</sub>地想分明現  
 周圍七八段也 其後廿三日後  
 夜并朝又分明現<sub>レ</sub>之云云

正治二年二月之比 地想等五

其後 右の目より光明をは  
 なつ 其光の端あかし 又  
 眼に瑠璃あり 其形瑠璃の  
 壺のことし 瑠璃の壺には  
 あかき花あり 寶瓶のこ  
 し 又日没の後に出て 四  
 方を見れば方毎に青くあ  
 き寶樹あり 其たかさ定な  
 し 高下心にしたかひて  
 或は四五丈 或は二三丈也  
 九月廿二朝に地想分明に現  
 す 周圍七八段はかり也  
 同廿三日後夜 及朝に且又  
 分明に現す 正治元年乙未八  
 月時正七日の別時の間 淨  
 土の依正しきりに現す 又  
 左右の眼より光をはなつ  
 心蓮房粗是を見て源空にか  
 たる 源空嘆しておとろか  
 す

同二年庚申二月 地想等の



觀行住坐臥隨<sub>レ</sub>意任<sub>レ</sub>意任<sub>レ</sub>運

現<sub>レ</sub>之 建仁九年二月八日後

夜聞<sub>ニ</sub>鳥舌<sub>ヲ</sub>、琴音聞<sub>ニ</sub>笛音等聞

其後隨<sub>レ</sub>日自在聽<sub>レ</sub>音

正月五日 三度勢至菩薩御後

丈六許御面現云云 西持佛堂勢

至菩薩形 丈六面現 是則此

菩薩既以<sub>ニ</sub>念佛法門<sub>ヲ</sub>爲<sub>ニ</sub>所證

法門<sub>ヲ</sub>故今爲<sub>ニ</sub>念佛音<sub>ヲ</sub>示現

其相不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑也 同廿六日

始座處<sub>下</sub>四方一段許青瑠璃地

也云々

五觀行住坐臥に心に隨て任  
運に現す

元久元年辛酉 正月廿五日

西の持佛堂の勢至菩薩の御

後に 丈六はかりの御面三

度現す このほさつは念佛

をもて所證の法門とし給か

故に 今念佛者の爲に其相

を示現し給へる事 これ違

疑すへからず 同廿八日

座所の下より初めて四方一

段はかり 青瑠璃の地とな

る 二月八日の後夜に 鳥

の音 琴の音 笛の音をき

く 其後は日にそひて 自

在に種々の音聲をきく 同

二年壬戌 八月時正七日の別

後の間 初日に地想觀現

す 第二日の後夜晨朝に又

分明に現す 第三日より

第七日に至まで 地想 費

樹 寶池 寶樓等 行住坐臥心にまかせて任運にこれを見る

於<sub>レ</sub>今者 依<sub>二</sub>經并釋<sub>一</sub> 往生無疑 地觀<sub>レ</sub> 文心得<sub>レ</sub> 無<sub>レ</sub>疑故云云  
可<sub>レ</sub>思也 建仁二年二月廿一日 高阜少將殿於<sub>二</sub>持佛堂<sub>一</sub> 謁<sub>レ</sub>之 其間如<sub>レ</sub>例修<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub> 見<sub>二</sub>阿彌陀佛<sub>一</sub>之後 障子徹<sub>二</sub>通佛面<sub>一</sub>而現 大如<sub>二</sub>長丈六佛面<sub>一</sub> 即忽隱給 廿八日午時也

元久三年正月四日 念佛之間 三尊現<sub>二</sub>大身<sub>一</sub>又五日如<sub>レ</sub>前云云

此三昧發得之記 年來之間 勢觀房秘藏不<sub>二</sub>披露<sub>一</sub>於<sub>二</sub>没後<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>圖傳<sub>二</sub>得之<sub>一</sub>書畢

〔20〕は『醍醐本』所收の「口稱三昧」『發得記』に出據をもつものである。このなか『琳阿本』と『古徳傳』とは、建久九年正月一日よりの三十七日間の別時念佛に於ける瑞相を傳承しているだけで、あとはこれを傳えていな

十二月二十八日午時 持佛堂にして高阜の少將に對面の時 例のことく念佛して阿彌陀佛の後の障子を見れば透徹て相好現す 其勢丈六の佛面のことし  
元久三年丙寅正月四日 念佛の間に三尊の相を現す  
同五日 又三尊大身をあらはし給と注し給へり 實にこれ念佛三昧現前の相分明なるもの也

いのである。『九卷傳』はいかなる傳承本によつたのか、『醍醐本』とも『西方指南抄』中本所收のそれとも少し相異なる點のあることに注目しなければならない。又『醍醐本』と『西方指南抄』との間にも同様なことを指摘することができ。

# V

C類 『醍醐本』以外の資料に出據を求め得るもの。

(1) 法然の講録『三部經釋』に出據を求め得るもの

[12]

傳 法 流 通 繪	古 德 傳	九 卷 傳	四 十 八 卷 傳
<p>或時 宮仕人かとおほしくて 尋常なる尼女房たち あまた 上人へ參て 罪深我等こと の五障の女人も 念佛申は 極樂往生すへきよし仰の候な るは 誠に侍やらん 委承 たきよし申されければ、 上人被<sub>レ</sub>仰けるは彌陀の本願 を憑むより外には 女人更に 往生の望をとくへからず</p>	<p>次別約女人發願云 設我得佛 其有女人 聞我名字 歡喜信 樂 發菩提心 厭惡女身 命</p>	<p>或時宮仕人かとおほしくて 尋常な る尼女房達あまた友なひて 上人へ まいりて罪ふかき我等こときの五障 の女人も念佛を申さは 極樂に往生 すへきよし仰の候なるは 誠に侍 るやらん 明に承度よし申ければ 仰られけるは彌陀の大願をたのみむ より外は 女人更に往生の望を遂へ からず 大願の忝事を能々きかるへ</p>	<p>四十八願の中の第卅五の女人 往生の願の意をのべての給は く 上の念佛往生の願は男女</p>

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

をきらはず 今別にこの願あるところいかん

つらつらこの事を案するに  
女人さはりおもし 別して女人に約せすは すなはち疑心を生ずへし そのゆへは 女人はとかおもし

願の忝事を能々可令聞給

終之後 復爲女像者 不取正覺文 付此有疑 上念佛往生願 不嫌男女 來迎引接互男女 繫念定生願又然也 今別有此願其心云何

女人は障重して 罪深故に

情案此事 女人障重 明不約

一切の處には皆嫌たり 是則内に五障あり 外に三従ある故也 五障と云は 一者不得<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>梵天<sub>一</sub> 二者帝釋 三者魔王 四者轉輪聖王 五者佛身とならずと云り 既に大梵高臺閣にも嫌て 梵衆梵輔の雲を望事なく 帝釋柔輓の床にも下されて 卅三天の花を翫事なし 六天魔王の位 四種輪王の跡を望に 永絶て影をさゝされは 天上天下の賤き果報 無常生滅のつたなき身にたにもならず 況諸佛の淨土に不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>思寄<sub>一</sub> 此日本國たにも 貴くやことなき靈地靈驗の砌には皆悉嫌

女人者 卽生疑心 其由者女人過多障深 一切處被嫌道宣引經云 十方世界有女人處 卽有地獄云 加之内有五障 外有三従 五障者一者不得作梵天王 二者帝釋 三者魔王 四者轉輪聖王 五者佛身云 一者不得作梵天王者色界初禪之王 梵衆梵輔之王也 彼尚生滅之境 輪轉之質無量梵王更居 全以女身無登高臺閣者 無刷三鉢之襟者此尚難 何況往生哉 可疑之故 別發女人往生願 二者帝釋者 欲界第二天須彌八萬之頂 三十三天王殊勝殿主也 彼又五衰之形魔滅之境 若干

し

女人は障重く罪深か故に 一切の所にはみな嫌たり 是則内に五障あり 外に三従あるか故也 五障といへるは 一には梵天王とならず 二には帝釋とならず 三は魔王とならず 四には轉輪王とならず 五には佛身とならずといへり 既に大梵高臺の閣にも嫌はれて 梵衆梵輔の雲をのそむ事なく 帝釋柔輓の床にもくたされて 三十三天の花をもてあそふ事なし 六天魔王位 四種輪王の跡 望なくたえて 影をさゝされは 天上天下の賤き果報 無常生滅の拙き身にたにも成す 況諸佛の淨土おもひよるへからず 日本國たにも 貴くやことなき靈地靈驗の砌には 皆々悉くきはれたり

帝釋梵移云 未以女身登帝釋  
寶座者 三者魔王者 欲界第  
六天他化自在天王也 尚業報  
之質 遷變之處 百千魔王移  
居云 未有女身魔王云事 四  
者轉輪聖王者 東西南北四州  
之王 金銀銅鉄四輪之王也  
其中未一人有女輪王 五者佛  
身者 成佛男子尚難 何況女  
人哉 大梵高閣被嫌無望梵衆  
梵輔之雲帝釋柔軟被下 無  
翫三十三天之花 六天魔王之  
位 四種輪王之跡 望永斷影  
不指 天上天下尚賤生死有漏  
果報 无常生滅拙身不成 何  
況佛位哉 申有憚 思有恐  
三惑頓盡 二死永除 長夜云  
明 覺月正圓也 四智圓明之  
春苑 三十二相之花鮮發 三  
身即一之秋空 八十種好之月  
清澄 位妙覺高貴之位 四海  
灌頂之法王也 形佛果圓滿之  
形 三點法性圓融之聖容也

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

大梵高臺の閣にもへたてられ  
て 梵衆梵輔の雲をのそむこ  
となく 帝釋柔軟の床にもく  
たされて 三十三天の花をも  
てあそふ事なし 六天魔王の  
位四種輪王之跡 のそみなか  
くたえてかけをささす 生死  
有漏の果報 無常生滅のつた  
なき身とたにならず いかに  
いはんや佛のくらゐをや

比叡山は是傳教大師の建立  
桓武天皇の御願所也 大師  
自結界して谷を堺 峰を限て  
女人の形を入られされは 一  
乗の峰 高顯て 五障の雲た

實男子如善財大士一百一十城  
求 如雪山童子四句半偈身  
投 佛可成申候 緩行疎求  
全不可叶候 五千上慢 是男  
子 去成佛座而起 五闍提羅  
沙門結無間之業而落 凡佛道  
被嫌 佛家被棄者 不可勝  
計 何況女人身 諸經論被嫌  
在在處處被擯出 非三途入  
難無可赴方 非六趣四生無可  
受形 然則富樓那尊者成佛  
國 云無有諸女人 亦無諸惡  
道 等三惡道 永削女人跡  
天親菩薩往生論中 云女人及  
根缺 二乘種不生 同根毀敗  
種 遠絶往生之望云 諸佛淨  
土不可思寄 此日本國 貴無  
止靈地靈驗砌 皆悉被嫌云云  
比叡山 是傳教大師建立 桓  
武天皇之御願也 大師自結  
界 堺谷局峯 不入女人形  
一乘峯高立 五障之雲無聳  
一味之谷深湛 三從之水無

所謂比叡山は傳教大師の建立 桓武  
天王の御願なり 大師自結界して  
谷をさかひ峰を限て 女人の形を入  
られされは 一乗の峰たかく顯て  
五障の雲たなひく事なく 藥師醫王

諸經論の中にきらはれ 在々  
所々に擯出せられて 三途三  
難にあらすは赴へきかたなく  
六趣四生にあらすは受へきか  
たちなし

この日本には靈地靈驗砌には  
みなことごとくきはれたる  
比叡山は傳教大師の建立 大  
師みづから結界して谷をさか  
ひ峯をかきりて 女人の形を  
いれされは 一乘峯たかくして  
五障の雲たなひく事なく 一

なひく事なく 一味の谷深し  
て 三従の水流るゝ事なし  
薬師醫王の靈像は 耳に聞て  
目にはみす 大師結界の靈地  
は 遠見て近く臨ます 高野  
山は弘法大師結界の峰 眞言  
上乘繁昌の地也 三密の月輪  
普照 女人非器の暗をは  
てらさす 五瓶の智水ひさし  
く雖<sub>レ</sub>流 女人垢穢のあるを  
はすゝかす

聖武天皇の御願十六丈金銅の  
舎那の前には 遙是拜見 扉  
の内は 不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>入 天智天皇  
の建立五丈石像の彌勒の前  
は仰て是禮拜とも壇上には障  
あり 乃至 金峰の雲上 醍  
醐の霞の底までも 女人更にか  
けをさゝす 悲哉 雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>兩  
足上さる法の峰あり ふまさ  
る佛の庭あり 恥哉 雖<sub>二</sub>兩眼  
明一見さる靈地あり 拜さる  
靈像あり 此穢土の瓦礫荆棘

流 薬師醫王靈像 聞耳不視  
眼 大師結界靈地 遠見近不  
臨 高野山者 弘法大師結界  
峯 眞言上乘繁昌之地 三密  
之月輪雖普照不照 女人非器  
之闇 五瓶の智水雖等流 不  
麗 女人垢穢之質於此等所 尚  
有其障 何況於出過三界道之  
淨土哉

加之又聖武天皇御願十六丈金  
銅舎那前 遙雖拜見之尚不入  
扉内 天智天皇之建立五丈石  
像彌勒前 高仰雖禮拜之 尚  
壇上有障 乃至金峯雲上 翻  
醍醐底 女人不指影 悲哉  
雖備兩足 有不登法峯 有不  
踏佛庭 恥哉 雖兩眼明 有  
不見靈地 有不拜靈像 此  
土瓦礫荆棘之山 泥木素像佛  
有障 何況衆寶合成之淨土  
萬德究竟之佛乎 因茲往生可

の靈像は 耳に聴きて目には見す  
大師結界の靈地は 遠くみて近くの  
そます 高野山は弘法大師結果の  
峯 眞言上乘繁昌の地也 三密の月  
輪遍く照といへとも 女人非器のや  
みをは<sub>レ</sub>不照 五瓶の智水ひとしく流  
と云へとも 女人垢穢のあかを<sub>レ</sub>は灌か  
す

聖武天皇の御願 十六丈金銅の舎那  
の前には 遙にこれを拜見すといへ  
共 なを扉の内には入られす 天智  
天皇の建立 五丈石像の彌勒のまへ  
には仰て是を禮拜すれ共 なを壇の  
上には障りあり 金峰山の雲の上  
醍醐の霞の底までも 女人更にか  
けをさゝす 悲哉 兩足ありといへと  
も 登さる峰あり ふまさる佛の庭  
あり 恥哉 兩眼明かなりといへと  
も 見さる靈地有 拜せさる靈像あ  
り 此穢土の瓦礫荆棘の山澤 泥木

味谷ふかくして三従の水なか  
るゝ事なし 高野山は弘法大  
師結界の峯 眞言上乘繁昌の  
地也 三密の月輪あまねくて  
らすといへとも 女人非器の  
やみをは<sub>レ</sub>てらさす 五瓶の智  
水ひとしくなかるといへとも  
女人垢穢のあかを<sub>レ</sub>はすゝかす

聖武天皇の御願 十六丈金銅  
の舎那 はるかにこれを拜見  
すといへとも なほ扉の内には  
いれられす 天智天皇の建  
立五丈石像の彌勒あふきてこ  
れを禮拜すれとも なを壇の  
上には障あり 乃至金峯の雲  
のうへ 醍醐の霞のそこ 女人  
更にかけをさゝす 悲哉 兩足  
ありといへともものほらさる法  
の峯あり ふまさる佛の庭あ  
り 恥哉 兩眼あきらかなりと

有其疑故鑒此理別有此願云

の山 泥木素像の佛たにも猶其障ある程の罪重き身なれば 諸經諸論中に嫌 在々所々に擯出せられて 三途八難にあらすよりは 趣へき無方 非ニ六趣四生よりは受へき形もなし然者 道宣は經を引て十方世界 女人有處には必地獄有と釋し給り

如レ此三世の諸佛にも捨終られ 十方浄土にも門をさゝれたる罪惡の女人をは 只彌陀のみそ助救はんと云願を發給る可誠憑ある物也 所謂四十八願中の第十八の念佛往生の願には 十方衆生至心信樂 欲レ生ニ我國 乃至十念若不<sub>レ</sub>生者 不<sub>レ</sub>取正覺」と暫給は 一切善惡の男女 皆是に漏たるはなけれども 第卅五の願に 別して女人往生の願を立り 是則女人は よもと疑をなして 念佛往生の益

素像の佛たにも なを其障ある程の罪重き身なれば 諸經諸論の中にも嫌はれ 在々所々にも擯出せられて 三途八難にあらざるよりは趣くへき方もなく 六趣四生にあらざるよりは受へき形もなし されは道宣は經を引て十方世界に女人ある所には必地獄ありと釋し給へり

如レ此三世諸佛にも捨はてられ 十方浄土にも門をさゝれたる罪惡の女人をは只彌陀のみそ助救はんといふ願を發給へる 誠に 憑しかるへき者なり 所謂四十八願中の第十八の念佛往生の願に 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不<sub>レ</sub>生者 不取正覺とちかひ給へは 一切善惡の男女是にもれたるはなけれども 第三十五の願に別して女人往生の願を立給へり 是則女人は一切の事においてうたかひをなす間 十方衆生とちかひ給へとも 罪ふかき女人はよも入しと疑て念佛往生のやく

いへとも 見ざる靈地あり 拜せざる靈像あり この穢土の瓦礫荆棘の山 泥木素像の佛たにも障あり いかにいはいや衆寶合成の浄土萬德究竟の佛をや これによりて往生そのうたかひあるべし かくかゆへに此理をかゝみて別にこの願あり



に可し漏故 別して女人往生の願をは立給る也 つたなき穢土の堺たにも猶嫌たる女人なれとも 本願を憑 名號を唱は 出過三界萬德究竟の報土に 迎と願し給へる廣大慈悲の忝さは中々詞を以も難述者也

善導和尚 今の女人往生の願を釋給るに 彌陀の大願力による故佛の名號を稱れば 命終時 女人を轉して男子となる事を得て 彌陀 手をさつけ 菩薩 身を助て 寶花の上座し佛奉隨て往生し 無生を悟とも釋し 又一切の女人 若彌陀名號願力によらずは 千劫萬恆沙劫を経とも 女身轉する事を不可得と釋給へり

此度彌陀の本願に相て 最後臨終に男子の身と作れまいらせて 彌陀如来の御迎に預り

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

にもれぬへきかゆへに別して女人往生の願をは建給へる也 拙き穢土の境にたにも猶嫌はれて障重き女人なれとも 本願をたのみて名號を唱へは 出過三界萬德究竟の報土に迎へとらんと願したまへる廣大慈悲の忝なさは 申に詞をもつて述難き者也

善導和尚今の女人往生の願を釋し給へるには 彌陀の大願力に乗するか故に 女人佛の名號を稱すれば 命終の時 女身を轉して男子と成事を得て 彌陀手を授け 菩薩身を扶て 寶花のうへに座せしめ 佛にしたかひ奉て 往生して無生を悟とも釋し 又一切の女人 若彌陀の本願力によらずは 千劫萬恆沙劫を経ても 速に女身を轉する事を得へからすとも釋し給へり

此度彌陀の本願にすかりて極樂にまいらすしては 無量劫にも女人をは轉すへからす 無始より以來女人の

善導和尚この願を釋しての給はく 彌陀の大願力によるか

ゆへに 女人佛の名號を稱すれば 命終のとき女身を轉し 男子となる事を得 彌陀御手をさつけ 菩薩身をたすける 寶花のうへに坐し 佛にしたかひて往生し 佛の大會にいたりて無生を證語す 一切女人もし彌陀の名 願力によらずは 千劫萬恆沙等の劫にも つるに女身を轉することを得へからすといへり 是則女人の苦をぬき女人の樂をあたふる 慈悲の誓願利生なり

已上見  
于大經

觀音大士の金蓮に乗て奉 無  
 數の化佛 無量の聖衆に圍遶  
 せられ 須臾の間 無漏の報  
 土往生して 無量の快樂に預  
 らん事は 喜あらずや ゆめ  
 く念佛物うからず やすき  
 念佛申て可<sub>レ</sub>得樂を二物也と  
 て 本願の貴 憑しき次第を  
 かきくときの給ければ 其座  
 に侍ける女房たち 皆々涙を  
 流して 念佛門に入けり 是  
 を傳聞女房 寧念佛にいさみ  
 なからんや

身を受たりき 今より後なを六道四  
 生に輪廻せん間も 形をかへ質をあ  
 らたむといふこと有とも なを女身  
 をうけ 一切心にまかせざらんは悲  
 かるへき事也 況女身を改さるのみに  
 も非ず 三途八難の底に沈て重苦  
 をうけん事後悔す共誰か是を救は  
 ん 今幸に彌陀の本願にあひ奉て  
 名號を唱斗の行によりて 最後臨終  
 に男子の身となされまいらせて彌陀  
 如來の御迎にあつかり 觀音 大勢  
 至の金蓮に乗し 無數化佛 無量の  
 聖衆に圍遶せられ奉て須臾の間に無  
 漏の報土に往生する時 三惑頓につ  
 き 二死永く除き 長夜こゝにあけ  
 覺月正に圓なり 四智圓明の春の花  
 には三十二相の色あさやかにひら  
 け 三身即一の秋の空には八十種好  
 の月清くすめる 位は妙覺高貴の位  
 四海灌頂の法王也 形は佛果圓滿の  
 形 三點法性の聖容にして 無邊の  
 快樂にはこらん事は 豈悦にあらず  
 や 努々念佛に物うかるへからず

惡道に墮て萬の苦をうけんよりは  
やすき念佛を申て樂を得へき物なり  
とて本願の貴く憑敷次第をかきく  
きのたまひければ 其座に侍ける女  
房共皆泪をなかりて 念佛の門に入  
りにけり 是を傳きかな女人寧念  
佛にいさみなからんや

〔12〕は『無量壽經釋』の所説を『傳法流通繪』の傳記作者が始めて傳記のなかに、尼女房の問いに對する答えとしてもちこんだものである。つまり傳記作者である耽(湛)空が女人往生ということに關心をもち、又そうした時代の要請に答える意味において、傳記にもちこんだであらうことが察せられる。今對照表によると『古德傳』は漢文體そのままを踏襲するのみならず、寛永九年版『無量壽經釋』の女人往生に關するところの全文をそのまま掲載していることが知られる。『傳法流通繪』と『九卷傳』とを比較してみると、おおむね『九卷傳』は『傳法流通繪』を傳承しているが、最後の部分において相異を見出すことができる。『傳法流通繪』は『無量壽經釋』にもとずいてはいるが、抄略したところも、追加しているところもある。『四十八卷傳』はこれを一層簡略化している點が、めだつが、これには特に『無量壽經釋』によつたことを注記して「已上見于大經釋取要抄之」としている。

〔45〕 東大寺における説法——三部經に付したる事

〔45〕は東大寺における三部經の講説を漢文體をもつて掲載したものである。『昭和重修法然上人全集』の編者石井教道博士も「此三部經釋ハ上記所載本ト大ニ異ナル故ニ別出ス」指摘し、特別にこの『古德傳』所收の三部經釋

を掲載しているように、『古本漢語燈錄』等におさめられているものと相當異なつてゐるので、比較對照をなすことができない。とともにこの『古德傳』所收本はいかなる原本にもとずいたかあきらかにし得ない。今、兩者を比較することによつて同文を見出し得た點を指摘すれば次の通りである。

「彌陀如來本行菩薩道之時……六度圓滿萬行具足」にいたる文は、『無量壽經釋』（寛永九年開板本）の「女人往生」についての釋に續く、「不可思議非載永劫積植菩薩無量行願 難行苦行積劫累德」の釋と同文であり、更に又同經釋「四十八願中 第十八念佛往生願有二意……我等衆生拔苦與樂心也」までの文は、「女人往生」についての釋の直前にある「抑四十八願 皆有拔苦與樂之義」の箇所の釋を全文使用したものである。

その他の資料に出據を求めうるもの

〔5〕 七箇條起請文

〔6〕 元久元年の起請文

〔26〕 一念停止狀

以上の三つは、起請文、制誡に屬する詞であり、法然の詞といつても性質の異なるものである。特に〔5〕については二尊院にその原本が藏せられている。紙數の都合もあつてこれらの三つについては別稿にゆずりたいと思う。

〔34〕 禪勝房に對して信と行とを説く

〔37〕 天に仰ても悦、地に臥ても悦、

この兩者はともに『西方指南抄』下末におさめられる無題の法語に出據をもつものであり、それらの點については既に拙稿「法然聖人繪に引用されている法然の詞について」において論述したから、それにゆずりたいと思う。

〔14〕 明遍との問答

〔14〕の問答は『明義進行集』卷第二に出據をもつものであり、〔34〕〔37〕と同様既に拙稿において論述したから省略したいと思う。

〔16〕

決疑鈔裏書	琳阿本	古徳傳	九卷傳	四十八卷傳
<p>稱名本願立故 此邊稱名勝行 有マシキ也 此義故上人立 給時 師範<small>般若空意</small>觀 佛勝<small>眼房也</small>稱名劣也 云云 故上人猶念佛 勝事立給 觀空腹立枕以 上人背打 先師良忍上人 觀佛勝タリト コソ披仰云云</p>	<p>阿彌陀佛稱名を本願 とたて給へる故をも つてこの故に稱名に するゝ行あるへか らす上人たて給とき 師範觀空上人云 觀 佛はすくれ稱名はお とれはなりといふ 上人なを念佛すくれ たる義をたて給ふ 觀空はらちて拳を にきりて上人のせな かをうちて 先師良忍上人も觀佛 はすくれたりとこ</p>	<p>或時黒谷の幽栖にして 觀空上人 往生要集 を談せられけるに 觀稱の二をたて、稱名 を觀佛にいれて 觀佛すくれたるよし 義を 成せられければ 上人末座に列て この義不可然 稱か家の觀 なり されは序にかへりて其意を得へし 依 念佛一門云云 如何か此文を消して觀佛による といふ義を立哉とのたまふ こゝに房主腹立して云 先師良忍上人も觀佛 すくれたり とこそおほせられしか 御房は いつくより相傳して稱名すくれたりという義 をはたてらるゝそやと 聖人云 此條にをき ては貴命にしたかひかたし そのゆへは 經 論章疏をみるに 一部始終を序題にかへし料 簡する是故實也 而にさきにのふるかこと</p>	<p>彌陀如來 稱名を本 願とたて給へる上に は 往生の業におき ては 稱名にするゝ る行あるへからす と 上人たて給ふ時 師範觀空上人觀佛は すくれ稱名はおとれ る也との給ふを 上人 なほ念佛勝た る義をたて給ふに 觀空上人腹立して こふしをにきりて上 人のせなかをうち て 先師良忍上人も</p>	<p>あるとき上人往生の業 には 稱名にすぎたる 行 あるへからすと申 さるゝを 慈眼房は觀佛すくれた るよしをの給ければ 稱名は本願の行なるゆ へに まさるへきよし をたて申たまふに 慈眼房又先師良忍上人 も觀佛すくれたりとこ そおほせられしか と の給けるに 上人良忍上人もさきに こそむまれ給たれと</p>

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

上人云 良忍  
上人先ニコソ  
生給タレ云  
彌腹立足駁取  
又打給云云

そ仰られしかとの給  
上人云 良忍上人も  
さきにこそむまれ給  
たれと

爰に叡空上人いよ  
くはらちてく  
つぬきにおりてあし  
たをとりて 又うち  
給

聖人云 聖教をはよ  
く御覽候はてと  
あはれなりしこと也

く その文にむかふに義理いよく明けし  
よくく聖教をは御覽候はてと云 其時叡空  
上人こさかしき小僧かなとて 木枕をとりて  
なけうちにしたまふ 聖人かたはらへたちか  
くれたまひけり 後によくく文をみるに  
聖人の立義 文にかなひ理をふくめり 觀佛  
はまことに稱名にはあらそふへきにあらざり  
けりとみなをされければ 後日に聖人を讀師  
の座に囑せらる しかれとも聖人固辭の禮ふ  
かし そのとき座をたち手を引て 枉て此書  
を談したまふへしと このうへは禪命にした  
かふとて 座になをりて 此集のころ 往  
生極樂の正因濁世末代の目足 念佛の一行に  
ありとみえたるよし 文をあさかへし 義を  
わきまへて いみしく講したまひければ 叡  
空も感涙にむせひ 所化も歸伏の思あさから  
ざりけり あはれにたうとかりしことともな  
り

さきにこそ生れ給ひ  
たれと 上人申され  
ける時 叡空上人彌  
腹をたて、靴ぬき  
におりて あしたを  
取りて又うち給へ  
は 聖教をよくく  
御覽候はせとそ 申  
されける哀なりし事  
也(三四六)

申されけるととき  
慈眼房腹立したまひけ  
れは善導和尚も 上來  
雖說定散兩門之益佛望  
佛本願意在衆生 一向  
專稱彌陀佛名 と尺し  
たまへり 稱名すくれ  
たりといふことあきら  
かなり 聖教をはよく  
く御覽給はてとそ申  
されける

〔16〕は黒谷慈眼房のもとにあつた法然が、師叡空との間に交した問答である。『琳阿本』、『九卷傳』、『四十八卷傳』に掲載されている問答は、おおむね良忠作にかかわる『選擇傳弘決疑鈔裏書』の第四處に等同である點から、これを最初に掲載した『琳阿本』の成立年代が、『裏書』の成立した正元元年(一二五九)以後なることを推定す

るに役立つ。

なお『古德傳』に掲載されている問答は、他のどの傳記の問答とも敘述を異にしていることを見逃してはならない。

念 佛 名 義 集

琳 阿 本

九 卷 傳

本山ニ人々多ケレトモ 年來ノ間契リ有人ハ  
證眞寶池房法印也 彼法印ハ故黒谷慈眼房觀  
空上人ノ菩薩戒ノ弟子也 我黒谷上人御房ノ  
弟子ニテ有り 彼法印ハ其御弟子ニテ御ハセ  
シカ故ニ 一室ノ同朋ナル故ニ二世ノ契リ深  
シ 然ルニ手自人ナリ即聖光上 彼法印ノ許ニテ天台宗  
ノ法門を習ハレタレハ 取分テ契リ深キ人ノ  
弟子カ 今我ニ順ヒテ此淨土ノ法門ヲ習ヒ傳  
ルト思ヒ深キ故ニ 露塵許モ忘レ申サヌソ  
ト常ニ仰セ給ヒシ

山門の同侶猶契あり 況證眞法印  
の門人なり かの法印は源空か甚  
深の同侶 後世菩提を契たりし人  
の弟子にてありしか 源空か弟子  
になりて 八ヶ年かあひた受學せ  
し人也云云

上人の常の仰には  
山門住侶なを契あるへし 況や辨阿は  
證眞法印の門人なり 彼法印は源空か  
甚深の門侶 後世菩提まで契たりし人  
の弟子にてありしか 源空か弟子とな  
りて 八ヶ年受學せる也と

〔18〕の詞は、法然の弟子となつた聖光房辨長が、自分と同じく叡空の菩薩戒の弟子である寶地房證眞の弟子であつた點を強調したもので、辨長の『念佛名義集』卷中及び、『念佛三心要集』に掲載する法然の詞にその出據を求めることができる。『念佛名義集』は「歳七十にまかり成て候身」（卷下）と著者自身が言っている點からすると、おおむね寛喜年間（一二二九—一二三一）の作であることが知られる。従つてこのことは『琳阿本』の成立年代に

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

も關係をもつが、そのことよりもむしろ、次に掲げる〔22〕の詞の出據及び、〔16〕のそれとともに、『琳阿本』が辨長・良忠と言つた所謂淨土宗鎮西流に大變親密な關係にあることを物語るものとして注目さるべきであらう。

〔22〕

徹 選 擇 集

上人又告言

有所造之書 所謂選擇本願念佛集是也 此書之造意者 九條殿下向源空而示高命云 每對面之次念佛往生之義雖度聞之 即施即廢也 請註其文賜予(中略)殿下告上人言 今此書者淨土宗之奧義也 上人在世之時從禪室草菴勿令披露(中略) 源空雖蒙此病誠露命難定 今日不知死 明日不知死故以此書密付屬汝 勿及外聞云云

琳 阿 本	九 卷 傳	四十八卷傳
建久九年戊正月 上人聖光房に示していはく 殿下敎命によりて選擇集一卷を作 ふかく秘すへきよし仰を蒙りて流布するにあたはす 世にきこゆる事あれとも うつす人なし 汝は法器の仁也 我立するところ 此書をうつして 末代にひろむへし	建久九年に 選擇集を授くる 其詞にはこれ月輪殿の請によりて撰所なり	建久九年の春 上人選擇集を聖光房にさつけらる これ月輪殿の仰によりて撰る所なり いまた披露に及はすといへとも
汝は法器の仁也 此書をうつして末代に廣むへし	汝は法器なり 傳持にたへたり はやくこの書をうつして末代にひろむへし	

〔22〕の詞は然然が辨長に『選擇集』を授與する時のべた詞とされ、嘉禎三年(一二三七)辨長によつて著わされ



た『徹選擇集』卷上にその出據を求めることができる。

〔29〕 聖光房辨長に三重の念佛を説く

〔30〕 源空の申す念佛は阿波の介の申す念佛と同じ

〔29〕〔30〕の兩つについては、既に拙稿「法然聖人繪に引用されている法然の詞について」において指摘したように、康元二年（一二五七）良忠の作になる『決答授手印疑問鈔』にその出據を見出すことができる點、これらの詞を最初に引用した『弘願本』の成立年代に示唆を與える。

#### D類 出據のさだかでない詞

〔1〕 登嶺の決意を母に告ぐ

〔2〕 東大寺勸進職辭退のことば

〔3〕 念佛は自行のつとめ

〔8〕 常の詞に佛告阿難汝好持是語と

〔31〕 願念佛について

〔35〕 源空は明遍故に念佛者となる

〔32〕 勢觀房源智に一枚起請文を授く

〔39〕 塩飽西仁に對して、稱名は往生の翼と説く

以上八種の詞のなか、「1」、「3」、「8」の三種の詞については、既に拙稿「法然聖人繪に引用されている法然の詞について」のなかで論究したので省略したいと思うが、残りの五種即ち「2」、「31」、「55」、「39」については、

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

拙稿「法然聖人繪に關する諸問題」(『佛教文化研究』第十一號所收)においてふれるところがあつたので、論究はそれにゆずりたいと思う。

この外、同じく出據をあきらかにし得いものとして次に掲げる八種をあげることができる。

〔4〕 聖護院無品親王の問いに答う

〔7〕 縁は順逆にわり、引接人をきらわず

〔9〕 塩飽西仁に念佛をすゝむ

〔19〕 東大寺にて惡僧の問いに答う

〔27〕 隨蓮との問答

〔24〕 邊鄙の群類を化せんこと最莫大の利生

〔41〕 決定往生の人に二人のしなあり

〔47〕 白河の房での説法——耳四郎様の下で聽聞——

これら八種の出據のさだかでない詞については後日の研究に期待したいが、今このなか〔27〕について、出據と  
言うよりもこの問答の中心をなす「念佛はやうなきをやうとす」と言う詞について論究しようと思う。

〔27〕

高田本	琳阿本	古徳傳	九卷傳	四十八卷傳
念佛はやうなきを やうとす たゝつ	念佛はたゞ様なきを 様とする也 只常に	念佛は様なきを 様とするなり たゞ平	念佛はやうなきを やうとする也 但常	念佛は様なきを や うとす たゞひらに

ねに念佛すれば  
臨終にはかならず  
佛きたりてむかへ  
て、極樂にはま  
るなり

念佛をもちて詮とす  
へし

に稱名の行を專しすへ  
し

に念佛を唱へて功を  
つむへし

佛語を信して念佛す  
れば往生するなり

〔27〕は諸傳のなか『琳阿本』に初見し得る詞で、諸傳これを傳承しているが、多少語句に異同を認めざるを得ない。このなか、『高田本』の詞はその相違する點、もつとも著しいことが知られる。この「念佛は様なきを様とす」と言う詞は諸傳において、隨蓮が聽聞した「常におほせられ」ける詞とも、隨蓮に語られた詞、隨蓮の問いに答えた詞ともなっているが、今これを語録の上にみると次のようである。即ち『明義進行集』卷第二、白河上人信空の條に

先師法然上人ノアサユフ、ヒトニヲシヘラレシコトナリ。念佛ニハ全ク様ナシ、タ、申セハ極樂へ詣ル事トシ  
リテ、コ、ロヲ至シテ只申セハマイルコトナリ。モノヲシラヌウヘニ道心モ無ク、イタツラニソヘナキ物ノイフ  
（事字ナシ）  
（モ字ナシ）  
事ナリ。サ、イハムロニテ阿彌陀佛ヲ一念モ十念ニテモ申セカシト候シ事ナリ。（バリアントは『和語燈錄』卷第五  
「諸人傳説詞」——「白川消息よりいでたり」による）

とあり、亦『西方指南抄』中本所收、「法語十八條」のなかに

又云、念佛はやうなきをもてなり。名號をとなふるほか、一切やうなき事也と云り

と言う詞を收録している。この『法語十八條』は「上人が門侶の念佛の不審について應答され、又は折々物語つた

各種法然上人傳に引用されている法然の詞

法語など」を收録したものであり、「又アサユフ ヒトニヲシヘラレシ」と『明義進行集』にも言つてゐる點から、『琳阿本』に言う如く「常におほせられ」た詞の隨一であることが知られる。

さてこの詞は『明義進行集』に、「タ、申セハ極樂へ詣ル事トシリテ コ、ロヲ至シテ申セ」ば、自然に三心が具足し得ることを前提としてゐることを看過してはならない。各傳記が〔28〕として掲げた法然の詞につづいて、隨蓮が夢のなかで法然から教示を仰ぐことを記述してゐるが、この記事は「三心をしらすは 往生すへからす」と言う説を喧傳するものが輩出し、法然の教えを誤り傳える傾向が強くなることを豫想し、その誤りなることを指摘せんとして傳記作者が挿入したものであらうと思われる。かかる狀勢について辨長は

此<sup>レ</sup>比<sup>レ</sup>都<sup>レ</sup>ニモ田舎ニモ 法然上人御房ノ御弟子トテ木草ノ數ノ多ク イクラトモナク念佛ノ沙汰ドモシアイタル人候ヘトモ 一リモ故法然上人御房ノ仰セ候シ様ニ 安<sup>ス</sup>安ト何<sup>カ</sup>成人モ念佛ニ能<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>心入テ申セバ 三心ハ其<sup>レ</sup>心ニ自然ニ具テ往生スルゾト云フ人ハ一人モ不<sup>レ</sup>候

と、『念佛名義集』卷中に述べてゐる。かくして所謂「三心ハ能<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>習ヒ學ベト被<sup>レ</sup>教」その説に對する反論が、隨蓮の夢中物語となつて傳記の上にあられたと見ることが出来るであらう。

ちなみに〔27〕に類する法然の詞として、出據不明ではあるが『四十八卷傳』卷第二十一、「上人つねに仰られる御詞」の第三に

又云、南無阿彌陀佛といふは、別したる事には思ふべからず。阿彌陀ほとけ我をたすけ給へといふことばと心えて、心にはあみだほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿彌陀佛と唱るを、三心具足の名號と申也  
 と言う詞をあげることが出来る。

各種法然上人傳に引用されている法然の詞について

類		傳記別 出承 兼	傳流通 繪	琳阿本			弘願本			古徳傳				合計
				傳			琳			傳琳弘				
A類	醍醐本一期物語			13		36	(13)	43		(13)			12 (+6)	
				15				44		(15)				
				17				48		(17)				
				21				49		(21)				
				23				50		(23)				
								51						
B類	醍醐本その他	10	20	(10)	28	(11)	(26)	42	(10)	(20)	(38)	10 (+10)		
		11	26	(11)	33			46	(11)	(26)	(40)			
					38									
					40									
C類	その他	5	14	(6)	29	(5)	(14)	45		(14)		13 (+5)		
		6	16		30					(16)				
		12	18		34									
		22		37										
		25												
D類	出據不明	1	19	(1)	31	(1)	(27)	47	(1)	(19)	(39)	16 (+19)		
		2	24	(2)	32	(2)			(2)	(24)	(41)			
		3	27	(4)	35	(3)			(4)	(27)				
		4		(7)	39	(8)								
		7		(8)	41									
		8		(9)										
		9												
合計		12	15	⑨	14	⑥	④	10	5	⑫	④	51		
		12	24		24			31				⑨		

數字は法然の詞に附した通し番號

數字を ( ) で包んだのは傳承した法然の詞に附した通し番號

右に掲げた一覽表によつてあきらかなように、『傳法流通繪』に引用された法然の詞は通算十二種である。この中、出據のさだかでないものが過半數の七をしめ、又出據をあきらかにし得るもの五のなか、B類から二（『御臨終日記』）、C類から三（『三部經釋』一、起請文類二）と言う數字を示し、A類に出據をもつ詞を一つも引用していないのが他の傳記に異なる點である。次に『琳阿本』が新しく引用した法然の詞十五種のなか、出據をもつもの十二種に對して出據のさだかでないもの三種と言う數を示している。このなか、出據をあきらかにし得る詞十二は、A類の『醍醐本』一期物語に出據をもつもの五、B類の『御臨終日記』『三昧發得記』から各一、C類の起請文類一、聖光房の著である『徹選擇集』『念佛名義集』から各一、良忠の著である『決疑鈔裏書』から一、信瑞の『明義進修集』から一となつてゐる。又『弘願本』が新たに引用した法然の詞十四種のなか、出據をあきらかにし得るもの九、出據のさだかでないもの五という數字を示している。このなか、前者はA類から一、B類から四（『禪勝房との問答』から三、『三心料簡』一）、C類から四（『西方指南抄』二、『決答疑問鈔』二）となつてゐる。最後に『古德傳』に新しく引用された詞十種のなか、出據のあきらかにし得るもの九、出據をあきらかにし得ないもの一と言う數字を示している。このなか、前者はA類から六、B類——『醍醐本』別傳記から二、C類『三部經釋』から一となつてゐる。

今、これを出據別に統計をだしてみると、A類の『醍醐本』一期物語からの引用した詞十二種のなか、『傳法流通繪』は皆無、『琳阿本』が五、『弘願本』二、『古德傳』十一と言う數字を示している。この數字はこれら四つの傳記のなか、一番おそく成立した『古德傳』がいかに『一期物語』をよく利用したかを物語るとともに、一番早く成立した『傳法流通繪』成立のころには、勢觀房所傳の『一期物語』が普及されていなかったことを物語るもので

なからうか。次にB類——『一期物語』をのぞいた『醍醐本』に收められる法然の詞・行狀からの引用はすべて十種という數字を示している。このなか、『御臨終日記』からの引用は『傳法流通繪』に二、『琳阿本』と『古德傳』とに各三、『弘願本』に一となつてゐる。この外『三昧發得記』からの引用は『琳阿本』と『古德傳』とに各一、『禪勝房との問答』は『弘願本』に三、『古德傳』に二、『三心料簡』は『弘願本』に一、『別傳記』は『古德傳』に二となつてゐる。C類は總計十三種の法然の詞を見出し得る。このなか、『三部經釋』は『傳法流通繪』に一、『古德傳』に二、起請文の類は『傳法繪』に二、『琳阿本』と『古德傳』とに各二、『弘願本』に一、『西方指南抄』は『弘願本』に二、『明義進集』は『琳阿本』『弘願本』『古德傳』に各一、『徹選擇集』『念佛名義集』の二著を『琳阿本』に各一、『決疑鈔裏書』は『琳阿本』『古德傳』とに各一、『決答授手印疑問鈔』から二種の詞を『弘願本』が引用している。かくC類には、聖光房や良忠の著が引用されているが、このことは成立の年代や、傳記作者を考へる上に大いに參考となるであらう。D類にはすべて十六種あるが、このなか、『傳法流通繪』には七、『琳阿本』には九、『弘願本』には十、『古德傳』には九、それぞれ引用している。

このような統計から學びとれるところのことを左に記しておこうと思う。これら四種の傳記のなか一番早く成立した『傳法流通繪』が、先にも指摘したように出據のさだかでない法然の詞を過半数使用していると言うことは、傳記作者が法然と直接むすびついでいることから、彼自身が聽聞傳受したと思われる〔3〕〔4〕〔7〕〔8〕の類をかかげ得た外、彼の創作性を示すに足る如き〔1〕〔2〕の類をも掲載するに至つたからであるとみることが出来る。次に『琳阿本』と『弘願本』とは、そこに引用する法然の詞に限つて言うならば、相互にあまり關係をもたない傳記であり、しかもその成立の年代もさほど遠くへだたないで、接近していることが知られるであらう。兩

者の共通點は良忠の著書を引用していることである。特に『弘願本』は聖光房と勢觀房がそれぞれ法然から傳受した詞をかがけてゐるのに對し、『琳阿本』は聖光傳受の詞のみを掲げて、勢觀房傳受の詞をはずしてゐるのである。しかも『琳阿本』は聖光房をもつて「法器の仁」となすと言う法然の詞を引用し、暗に法然の正統を繼承するものこそ聖光房であることをほのめかしてゐる。これに對し『弘願本』にはそうした正統派を暗示するような詞をのせていないのである。私の結論を言うならば、兩者は良忠入寂前後ほど遠からぬ時代に、良忠が意圖した鎮西系統の京都進出に伴う勢觀房系統の吸收、及び法然・聖光房・良忠という三代を正統化せんとする二つの點のいずれかを編纂意圖として成立をみるに至つたものと思われる。即ち『琳阿本』の編纂意圖は後者であり、『弘願本』のそれは前者であり、兩者はその成立の地盤を等しくしながらも、つまり勢觀房系統をみずからの内に吸收した鎮西系統に地盤を置きつつも、ただ重點の置き方の相違が開きを生ずるに至つたとみるべきである。従つて兩者の成立の順位は『弘願本』を先とし、『琳阿本』を後と考えられるが、ほぼ時を同じくして成立したとみることができであろう。最後に『古德傳』についてみるに、『古德傳』がこれら四種の傳記のなかで一番數多く法然の詞を引用していると言う事實は、一番おそく成立したことを物語る一つの證據でもある。この傳記には通算三十一種の法然の詞を引用するなか、二十一種は前記三つの傳記からの傳承であり、わずかに十種の詞を新たに加えたのである。このことはこの傳記の編纂日數に關わることと思われる。このなか『琳阿本』が掲載した〔25〕を『古德傳』はなぜ傳承しなかつたのであろうか。又『弘願本』が引用した〔29〕〔30〕及び『琳阿本』が引用した〔18〕〔22〕の詞についても、『古德傳』はなぜ傳承することをさけたのであろうか。

先ず前者の『一念義停止狀』をなぜ傳承しなかつたのかと言う疑問を解決する上に、『弘願本』に掲載してゐる



『七箇條起請文』の署名の問題にふれてみよう。『弘願本』に掲載している『七箇條起請文』の署名を注意深くみる時、信空以下親西にいたる十四名を、七名宛に第一、二行に書し、幸西以下連生にいたる六名を第三行として書し、ついで善信、行空、成覺房の三名を第四行に改行して書いている。ここに問題視されることは第三行目の第七人目を空白にし、善信以下の三名をなぜ改行して書かなければならないかと言うことである。第三行目の第七人目に善信を署名し、第四行に行空、成覺房の署名をのせれば、第一、二、三行ともに七名宛となつて問題は生じなかつたのである。私はこの三名をわざわざ改行して書いたことに、次に示すような意圖を見出したいと思う。即ち善信以下の三名を別行に書いた所以は、彼等三名を一念義の系統——少くとも『弘願本』成立の背景視される聖光房・勢觀房・良忠の系統とは異つた系統とみなし、彼等との間に一線を劃せんとする意圖があつたればこそ、かかる所爲となつてあらわれたものと考えられる。かかる弘願本の作者（あるいは書寫者）の意圖を反映するものとして、『古德傳』をみることはできないだろうか。法然の詞を取捨選擇することは、その傳記作者の意圖にかかわつてゐる。従つて一念義と無關係でないことを意識する『古德傳』の作者は、當然この『一念停止狀』をはずして、傳承しなかつたとみるべきでなからうか。又後者、聖光房に關係ある詞については、『古德傳』編纂の根本意圖が、法然傳に親鸞を初登場せしめ、親鸞をして法然の愛弟であることを強調せんとするにあるとするならば、當然の結果として聖光房をかつぐようなことを敢てしないであろう。かかる點において、『古德傳』は〔29〕、〔30〕、〔18〕、〔22〕の詞を故意に傳承しなかつたとみることができる。

蓋これを要するに、從來各種法然傳の成立をめぐり、あるいはその編纂意圖なり、成立年代なり、傳記相互間の系列なりが論じられ來つたが、各種傳記に掲載している法然の詞についてふれるところごく稀であつた。然るに今

拙稿においてそうした先學の闕點を補う意味から法然の詞をとりあげ、その出據、傳承をあきらかにし、傳記相互間の疎密をつきとめ、編纂意圖乃至その成立年代、編纂者において立つ背景を想定し來つたのであるが、各種、法然傳の成立史的研究の上に、また法然の詞の研究の上に新しい道が開かれたとするならば望外の悦びとするところである。

(一九六二年八月八日脱稿)